

平成9年度

久留米市内遺跡群



東郷原今寺遺跡



正福寺遺跡



西屋敷遺跡

東郷原今寺遺跡
正福寺遺跡
西屋敷遺跡
山川南本村遺跡
西海道跡
道蔵遺跡
久留米城外郭遺跡



西海道跡



山川南本村遺跡

1998

久留米市教育委員会

平成9年度

久留米市内遺跡群

東櫛原今寺遺跡

正福寺遺跡

西屋敷遺跡

山川南本村遺跡

西海道跡

道蔵遺跡

久留米城外郭遺跡

序

筑紫平野の中心に位置する久留米市は、九州第一の河川筑後川に臨み、豊かな水と緑あふれるふるさとであります。この自然豊かな環境のもとで、旧石器時代から人々の営みは、さまざまなドラマを展開しつつ、今日までの永い歴史を育んでまいりました。特に、律令期の奈良・平安時代には古代国家の地方行政中枢機関である筑後国府をはじめ、文化の拠点となった国分寺がおかれるなど、行政・文化・経済・交通の要衝の地として栄えたところであります。さらに、近世では筑後川のほとりに久留米城が築かれ、筑後の中心地として発展してきました。

今日でもその地方拠点都市としての位置付けは変わらず、大いに繁栄を極めているところであります。しかし、市内には沢山の文化財が埋蔵され、開発の陰で多くの文化財が失われていることも事実であります。当教育委員会では、これらの開発に対処するため、事前に発掘調査を実施して記録保存を講じ、文化財保護の周知・啓発並びに文化財の保存に努力しているところであります。調査件数も年毎に増加し、これまでに知られていなかった貴重な遺跡の発見が相次いでいます。

ここに収録した東櫛原今寺遺跡・正福寺遺跡・西屋敷遺跡・山川遺跡・西海道跡・道蔵遺跡・久留米城外郭遺跡は、平成9年度に発掘調査を行って記録保存を講じたもので、本書はその報告および概要報告であります。

本書が、久留米の歴史をひもとく際の一資料として、さらには文化財保護の理解と普及の一助として役立つことができれば幸いです。

最後に、発掘調査に際しまして、ご理解とご協力を頂いた地権者をはじめ関係各位に対し、心より感謝申し上げます。

平成10年3月31日

久留米市教育委員会
教育長 桑野善吾

例 言

1. 本書は、平成9年度に久留米市教育委員会が国・県の補助を受けて実施した、久留米市内遺跡群の発掘調査の報告・概要報告を収録したものである。

2. 本書に収録した遺跡は、次のとおりである。調査番号

I 東柳原今寺遺跡（第6次調査）	199710
II 正福寺遺跡（第3次調査）	199712
III 西屋敷遺跡（第3次調査）	199714
IV 山川南本村遺跡（第5次調査）	199728
V 西海道跡（第2次調査）	199733
VI 道蔵遺跡（第12次調査）	199721
VII 久留米城外郭遺跡（第4次調査）	199732

3. 発掘調査は、文化財保護課の大石昇・白木守・園井正隆・神保公久・富永直樹・近澤康治がそれぞれ担当した。
4. 本書に掲載した図面の作成・製図、写真撮影は各調査担当者の他、非常勤の小澤知美・畠中和子・米沢美絵子と臨時職員の龍直美・友田美穂が行った。
5. 本書に関わる各遺跡の遺物・記録類は、久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されている。
6. 本書の遺構実測図に示した方位のうち、Nを付したものは磁北を、他は全て座標北を示す。遺構の略表記は、S Bー掘立柱建物跡、S Dー溝、S Eー井戸、S Iー竪穴住居跡、S Kー土坑および土壌墓、S Pー柱穴およびピット、S Xー埋蔵および不明遺構、Kー盛棺墓をそれぞれ示す。
7. 本書の執筆は次のとおりである。

I 東柳原今寺遺跡（第6次調査）	大石
II 正福寺遺跡（第3次調査）	白木
III 西屋敷遺跡（第3次調査）	園井
IV 山川南本村遺跡（第5次調査）	神保
V 西海道跡（第2次調査）	富永
VI 道蔵遺跡（第12次調査）	近澤
VII 久留米城外郭遺跡（第4次調査）	大石

8. 本書の全体編集は大石が担当した。

本文目次

I 東郷原今寺遺跡 (第6次調査)	1
II 正福寺遺跡 (第3次調査)	13
III 西屋敷遺跡 (第3次調査)	19
IV 山川南本村遺跡 (第5次調査)	35
V 西海道跡 (第2次調査)	52
VI 道蔵遺跡 (第12次調査)	62
VII 久留米城外郭遺跡 (第4次調査)	64
報告書抄録	66

挿図目次

I 東郷原今寺遺跡 (第6次調査)	Fig.27 基本図	15
Fig.1 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	Fig.28 遺構配置図 (1/100)	15
Fig.2 調査地点と周辺地形図 (1/2,500)	Fig.29 SD10完結状況 (南から)	15
Fig.3 調査区全景 (南から)	Fig.30 SD10断面実測図 (1/40)	15
Fig.4 遺構配置図 (1/80)	Fig.31 II 層内の遺物出土分布図 (1/50)	16
Fig.5 袋状竪穴SK5全景 (南西から)	Fig.32 II 層遺物出土状況 (南から)	16
Fig.6 袋状竪穴SK20全景 (南西から)	Fig.33 II 層遺物出土状況 (南から)	16
Fig.7 袋状竪穴SK5・20実測図 (1/80)	Fig.34 出土遺物実測図 (1/4)	17
Fig.8 竪穴住居SI12実測図 (1/80)	Fig.35 出土遺物①	17
Fig.9 竪穴住居SI12全景 (北西から)	Fig.36 出土遺物②	18
Fig.10 竪穴住居K15全景 (東から)	Fig.37 調査区全景 (南から)	18
Fig.11 竪穴住居K15実測図 (1/80)	III 西屋敷遺跡 (第3次調査)	
Fig.12 竪穴住居K15実測図 (1/12)	Fig.38 遺跡分布図 (1/25,000)	19
Fig.13 竪穴住居K15	Fig.39 周辺地形・調査地点位置図 (1/5,000)	20
Fig.14 溝SD14東端埋土状況 (西から)	Fig.40 西屋敷第0次調査 (南から)	20
Fig.15 土坑SK1全景 (南から)	Fig.41 西屋敷第1次調査 (北西上空から)	20
Fig.16 埋蔵SX16全景 (北東から)	Fig.42 西屋敷第2次調査 (北上空から)	20
Fig.17 埋蔵SX16・17実測図 (1/80)	Fig.43 北屋敷第4次調査 (北東から)	20
Fig.18 埋蔵SX17全景 (南西から)	Fig.44 トータル・ステーションによる測量風景	21
Fig.19 埋蔵SX16	Fig.45 調査トレンチ配置図 (1/400)	21
Fig.20 埋蔵SX17	Fig.46 北区全景 (南西から)	21
Fig.21 出土遺物実測図① (1/3)	Fig.47 南区全景 (北西から)	21
Fig.22 出土遺物実測図② (1/2・1/3)	Fig.48 遺構配置図 (1/200)	22
Fig.23 出土遺物①	Fig.49 SD1土層・完結状態 (南西から)	22
Fig.24 出土遺物②	Fig.50 SD39土層状態 (北西から)	23
II 正福寺遺跡 (第3次調査)	Fig.51 SD39土層実測図 (1/30)	23
Fig.25 調査区位置図 (1/2,500)	Fig.52 SD117土層実測図 (1/30)	23
Fig.26 周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	Fig.53 SK4土層実測図 (1/30)	23

Fig.54	SK4土層・完掘状態(北西から)	23
Fig.55	SK41遺物出土状態(北東から)	23
Fig.56	SK42遺物出土状態(北東から)	23
Fig.57	SK36遺物出土状態(南東から)	24
Fig.58	SK36実測図(1/30)	24
Fig.59	SK55・56完掘状態(北東から)	24
Fig.60	SK98遺物出土状態(南東から)	24
Fig.61	谷状遺構中央トレンチ土層実測図(1/40)	25
Fig.62	出土遺物実測図①(1/4・1/2)	25
Fig.63	出土遺物実測図②(1/4・1/2)	26
Fig.64	出土遺物①	27
Fig.65	出土遺物②	28
Fig.66	出土遺物③	29
Tab.1	遺物観察一覧表①	30
Tab.2	遺物観察一覧表②	31
Tab.3	遺物観察一覧表③	32
Fig.67	調査地周辺主要遺構配置模式図(1/1,500)	33
Fig.68	調査地から市ノ上天満宮を望む(南東から)	34
IV 山川南本村遺跡(第5次調査)		
Fig.69	表土剥ぎ状況(南から)	35
Fig.70	周辺の遺跡分布図(1/25,000)	35
Fig.71	調査地点位置図と周辺地形(1/2,500)	36
Fig.72	調査風景	37
Fig.73	遺構配置図(1/150)	37
Fig.74	調査区全景(南から)	38
Fig.75	調査区全景(上空から)	38
Fig.76	SI2 実測図(1/40)	38
Fig.77	SI2 全景(上空から)	39
Fig.78	SK150 全景	39
Fig.79	SK160 実測図(1/30)	39
Fig.80	SK160 遺物出土状態	40
Fig.81	SK191 遺物出土状態	40
Fig.82	SK191 実測図(1/30)	40
Fig.83	SI1 全景(南西から)	40
Fig.84	SI1 堀検出状況	41
Fig.85	SI1 堀実測図(1/40・1/20)	41
Fig.86	SK140 実測図(1/30)	41
Fig.87	SK140 遺物出土状態	41
Fig.88	SK100 全景	42
Fig.89	SK110 全景(北東から)	42
Fig.90	SK110 実測図(1/30)	42

Fig.91	SK170・180 全景(上空より)	42
Fig.92	SK190 全景(北から)	43
Fig.93	出土遺物実測図①(1/2・1/4)	43
Fig.94	出土遺物実測図②(1/2・1/4)	44
Fig.95	出土遺物実測図③(1/2・1/4)	45
Fig.96	出土遺物①	47
Fig.97	出土遺物②	48
Tab.4	遺物観察一覧表①	49
Tab.5	遺物観察一覧表②	50
Tab.6	遺物観察一覧表③	51
V 西海道跡(第2次調査)		
Fig.98	周辺の遺跡分布図(1/25,000)	53
Fig.99	調査地点の位置図と周辺地形図(1/2,000)	54
Fig.100	重機による表土剥ぎ風景	54
Fig.101	調査区奥り下げ風景	54
Fig.102	南壁土層図(1/80)	55
Fig.103	南壁土層状況(北東から)	55
Fig.104	調査区全景(北から)	55
Fig.105	遺構配置図(1/150)	56
Fig.106	SD3土層断面(北から)	56
Fig.107	SD4土層断面(北から)	56
Fig.108	SD2検出状況(南から)	56
Fig.109	出土遺物実測図(1/2・1/4)	57
Fig.110	出土遺物①(表・裏)	57
Fig.111	出土遺物②(表・裏)	57
Fig.112	出土遺物③(表・裏)	57
Fig.113	出土遺物④(表・裏)	58
Tab.7	遺物観察一覧表	58
Fig.114	字「車地」と推定西海道ルート(1/10,000)	59
Fig.115	調査地より北方を望む(南から)	59
VI 道端遺跡(第12次調査)		
Fig.116	調査地点位置図(1/25,000)	62
Fig.117	遺構配置図(1/100)	62
Fig.118	西区全景(気球写真)	63
Fig.119	東区全景(北から)	63
VII 久留米城外郭遺跡(第4次調査)		
Fig.120	調査地点位置図(1/30,000)	65
Fig.121	調査区全景(西から)	65
Fig.122	土坑SK31全景(東から)	65
Fig.123	遺構配置図(1/80)	65

1. 東櫛原今寺遺跡（第6次調査）

1. はじめに

本遺跡は久留米市東櫛原町1268-1に所在する。専用住宅建設に伴う緊急調査で、平成9年4月3日、地権者より埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼が提出されたため、同年同月18日、試掘調査を行った。試掘調査の結果、対象地全域に遺構・遺物が確認されたため、地権者と協議を行い、住宅建設部分についてのみ発掘調査を行うことで協議が成立した。平成9年5月23日より調査を開始し、平成9年6月19日調査を終了した。なお、対象面積は140m²で、調査面積は61m²である。

2. 位置と環境

東櫛原今寺遺跡は筑後川中流域左岸の洪積台地上に位置し、標高は11.7mを測る。当遺跡では、今回の調査を含め、これまでに6度にわたる発掘調査が実施されている。

第1・2次調査は、昭和51・63年、久留米市立櫛原中学校校舎改築の際に行ったもので、弥生時代前期の円形竪穴住居や袋状竪穴、中期の長方形竪穴住居や甕棺墓、後期の竪穴住居や掘立柱建物、古墳時代の竪穴住居、中世の土塼墓や溝、江戸時代の一字一石経などの遺構が検出されている。

第4次調査は、平成5年、同中学校の正門改修工事の際に弥生時代中期初頭の甕棺墓が4基発見されたため、急ぎで実施した調査である。

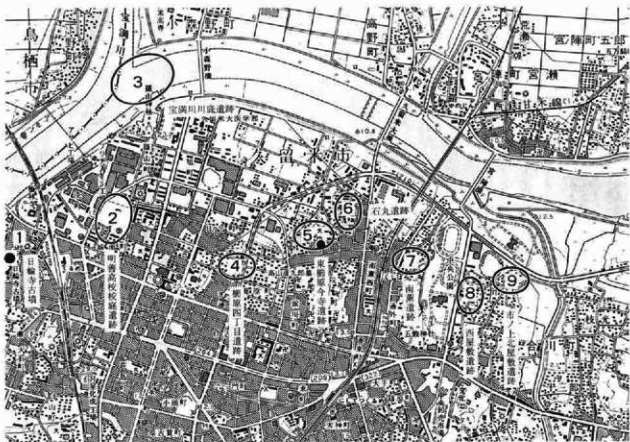


Fig.1 周辺の道路分布図(1/25,000)

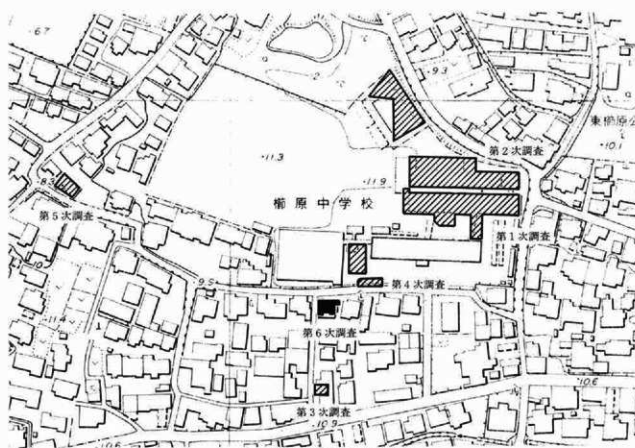


Fig.2 調査地点と周辺地形図(1/2,500)

第3・5次調査は、平成元年と6年に実施した専用住宅建設に伴う事前の調査である。第3調査では弥生時代中期の竪穴住居と中世室町期の溝と井戸、第5次調査では弥生時代中期の竪穴住居や土坑、古墳時代の溝などが検出されている。

今回の第6次調査は、第4次調査地点の南西に隣接する地点で、第3次調査地点の北に位置する。遺跡の中心を榎原中学校に求めると、今回の調査地は遺跡の南部に相当しよう。

周辺遺跡では、北東部に石丸遺跡がある。昭和2年、甕棺墓の合わせ口の粘土中から管玉が発見されたことで知られる遺跡で、昭和42年に甕棺1基が調査されている。さらに、昭和62・63年にはマンション建設などの際に調査が実施され、甕棺墓141基・土壇墓14基・石蓋土壇墓7基・木棺墓1基が検出され、弥生時代前期末から中期中葉までの墓地であることが判明している。石丸遺跡の南に隣接する榎原天満宮境内には支石墓の掌石と考えられる巨石があり、この石丸遺跡より移されたことが記されている。

国道3号線を挟んだ南東500mの地点には、平成5年度に調査が実施された南薫遺跡がある。弥生時代前期後半から中期初頭の甕棺墓71基・石棺墓10基・石蓋土壇墓9基・支石墓1基・木棺墓1基が出土している。さらに東方には、西屋敷遺跡や市ノ上北屋敷遺跡などがある。西屋敷遺跡は昭和57・58年に甕棺墓30基・土壇墓11基・石棺墓2基と平安時代から室町期の土壇墓17基を調査、市ノ上北屋敷遺跡は昭和52年に甕棺墓7基を調査した遺跡である。

また、本遺跡の南西方約500mには、水道工事の際に甕棺墓が発見された榎原四丁目遺跡がある。

これらの遺跡は、筑後川中流域左岸の洪積台地縁辺部に形成されるもので、筑後地方の歴史を解明する上で重要な資料を提供している。

3. 調査の記録

(1) 調査の概要

平成9年5月23日 調査を開始する。重機による表土除去作業後、遺構検出を行う。

5月26日 平板測量による遺構配置図を作成し、遺構の掘り下げを実施した。

5月29日 近世土坑の写真撮影。櫛原中学校内の三角点よりレベル移動を行う。

5月30日 溝の両端を掘り下げる。袋状竪穴の上面遺構を取り外し、掘り下げを実施する。

6月3日 確認調査により北東隅に竪穴墓が存在するとのことで、この北東部を拡張し竪穴墓を検出する。小児棺ではなく、成人棺である。

6月9日 中学校屋上より座標移動を行う。

6月10日 調査区の全景および個別遺構の写真撮影を実施し、袋状竪穴の南半を掘り下げる。

6月11日 トータルステーションで調査区内の遺構実測を行う。竪穴墓は手描きで、平面図を作成する。

6月17日 竪穴墓を除く全遺構の人力による埋め戻しとテントの撤収作業を行う。

6月18日 竪穴墓の断面図を作成。掘方の写真撮影を行い、調査を終了する。

6月19日 重機による埋め戻しを実施し、現場での作業を終了する。

調査地は、北側で約10cm・南側で30cmで、地山の黄褐色粘質土に至り、遺構は全てこの面で確認された。検出した遺構は、弥生時代の袋状竪穴2基・竪穴住居跡1軒・竪穴墓1基・土坑2基と江戸時代の溝1条・土坑3基、近世以降近代の埋蔵2基などである。遺物は、バンコンテナ5箱程度で差程多くはなく、弥生土器・石器、中・近世の土鍋・陶磁器・土師質土器・瓦・砥石・墓石などが出土している。弥生時代の石器には、有孔円盤・石錐・石斧・スクレイパーなどが見られる。



Fig3 東郷原今寺遺跡第6次調査 調査区全景（南から）

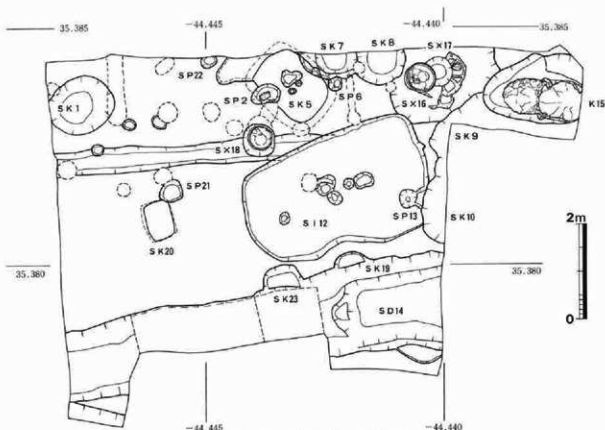


Fig.4 東佛原今寺遺跡第6次調査 遺構配置図 (1/80)

(2) 遺構の概要

a) 弥生時代の遺構

袋状竪穴

SK 5 (Fig. 5・7)

調査区の北端中央で検出した袋状竪穴遺構。平面プランは隅丸長方形を呈する。長軸は北西-南東方向を示す。北東側を一部近世の土坑SK 7に切られる。壁は極端に内傾して立ち上がり、床面はほぼフラットである。中央に柱痕跡と考えられる浅い小ピットがある。規模は上面で長軸155cm・短軸115cm、床面では長軸180cm・短軸142cm、深さ100cmを測る。埋土は上層は黄色地山ブロックが混入する暗褐色土で、暗黒褐色土の薄い層が中間に入り、暗黄褐色土となる。

出土遺物は少なく、僅かに弥生の壺の細片や黒曜石の剥片が認められた。

SK 20 (Fig. 6・7)

中央西寄りに検出した袋状の小竪穴遺構。SK 5の約1/4程の規模である。平面プランは長方形を呈し、壁はやや内傾気味に立ち上がる。床面が若干広い。長

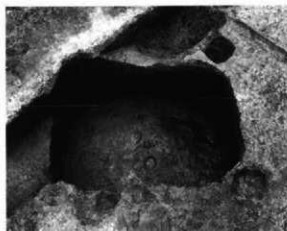


Fig.5 袋状竪穴SK 5全景（南西から）

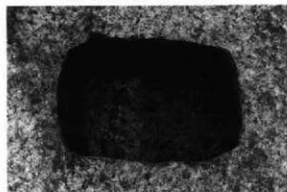


Fig.6 袋状竪穴SK 20全景（南西から）

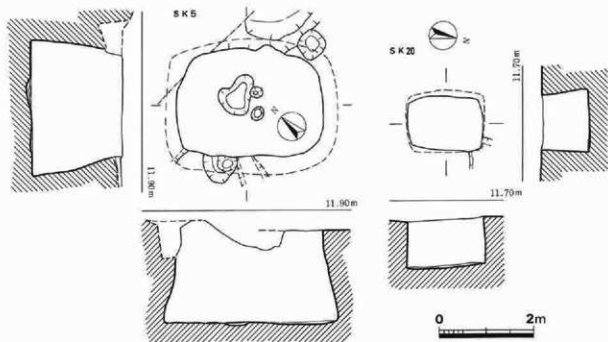


Fig.7 袋状竪穴SK5・20実測図 (1/80)

軸はほぼ南北方向を示す。規模は、80×57cmで、深さ50cmを測る。埋土は暗褐色土である。

弥生土器の細片2点とサヌカイトの剥片1点が出土している。

竪穴住居

SI2 (Fig.8・9)

中央東寄りに検出した。平面プランは東西に長い隅丸長方形あるいは楕円形状を呈する。長軸405cm、短軸255cmを測る。壁は、北東隅が一等残りが良く約25cmを検出している。床面はほぼフラットで、中央に支柱穴様のビットがある。また、東側は、黄色地山ブロック土で、堅く踏み堅められた痕跡が窺え、貼り床をしていた可能性がある。

この竪穴住居は、第5次調査で検出したSI2と同様の形状を呈している。SI2は一回り大き

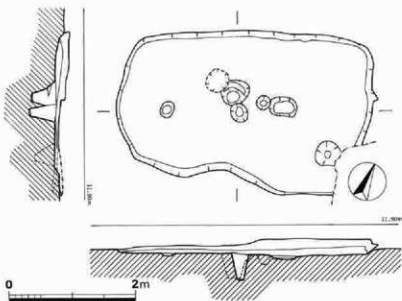


Fig.8 竪穴住居SI2実測図 (1/80)

く、中央に炉を持つ点が異なるが、全く同じ形状で主軸方向も一致している。なお、南東隅は土坑SK10と切り合う。SK10は調査区外に延び、砂利を多く含む埋土で、出土遺物も無く時期は不明であるが、北に位置するSK9と同様の弥生時代の土坑と考えている。



Fig.9 竪穴住居SI12全景（北西から）

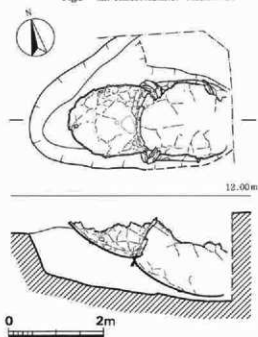


Fig.11 甕棺墓K15実測図（1/80）

甕棺墓

K15 (Fig.10・11)

北東隅に検出した合わせ口の大型棺である。甕と甕を使用し、少し小さい西側の上甕を挿入する。粘土目張りはない。主軸はほぼ東西方向を示し、傾斜角度は 26° である。掘方は一部調査区外に延びるので全容は明らかではないが、不整の楕円形と推測される。甕棺は水道配管工事で上半部が壊されていて、棺内に破壊された甕片が埋め戻されていたが、下半部は比較的良く残っていた。副葬品は出土していないが、上甕口縁部付近には僅かに朱が認められた。



Fig.10 甕棺墓K15全景（東から）

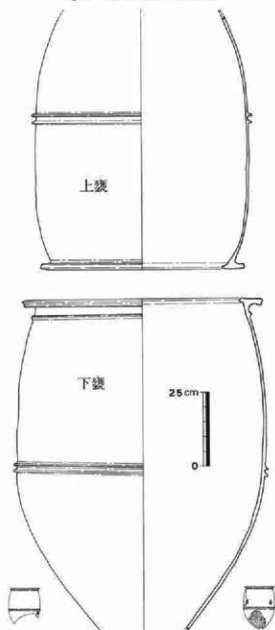


Fig.12 甕棺K15実測図（1/12）

本調査地点の北東方、僅か20mにも満たない第4次調査では、4基の甕棺墓が検出されている。1基は小児棺で、3基が大型棺である。大型棺の上甕には甕や甕や鉢型土器を用いていた。主軸はほぼ東西方向を示し、本遺跡の甕棺墓と連続する墓域を形成するものと推定される。また、第1次調査区の東端でも2基の成人棺が検出されており、墓域はさらに北東方に向かって約100m程延びるものと推測される。

甕棺 (Fig.12・13)

甕棺はともに底部を欠損する。上甕は逆し字状口縁で、外側へ大きく突出し若干外傾する。内側への突出は僅かである。胴部に二条の突帯を持つ。三角突帯とコの字状突帯である。口径は68.2cmで、現存高85cmを測る。下甕はT字口縁に近く、上端はやや外傾気味である。口縁下に一条のコの字状（山形）突帯と胴部に二条のコの字状突帯を持つ。口径80.4～81.3cmで、現存高114cmを測る。復元すれば器高120cm以上となる。胴部中位に3箇所と下位に大きな黒斑が認められる。

b) 近世・近代の遺構

溝

SD14 (Fig.14)

南端に検出した。東西走行の溝で、断面は逆台形状を呈する。東端と西端を掘り下げたが、東側が一段深くなっている。溝幅は東端で約200cm・深さ100cm、西端で150cm・深さ45cmを測る。弥生土器のほか中世の土鍋や近世陶磁器・瓦などを多く出土した。約45cm南に位置する第3次調査では、東西に走る中世室町期の溝を検出している。溝幅150cm・深さ40～60cmで、断面逆台形状を呈する。本遺跡の溝とほぼ並行関係にあることから、これらの溝は、中世以降近世にかけての屋敷地の区画溝の可能性が高い。なお、第1・2次調査でも中世の溝を確認している。

土坑

SK1 (Fig.15)

調査区の北西隅に検出した円形土坑。当初、井戸と思い掘り進めたところ、深さ約100cmで床面に達した。埋土は上層が黄色地山ブロック混入の灰色土で、下層は黄灰色粘質土である。上層は恐らく西から一気に埋められているものと推測される。弥生土器や18・19世紀代の近世陶磁器が出土している。



Fig.13 甕棺K15



Fig.14 溝SD14東端埋土状況（西から）



Fig.15 土坑SK1全景（南から）



Fig.16 埋甕SX16全景（北東から）

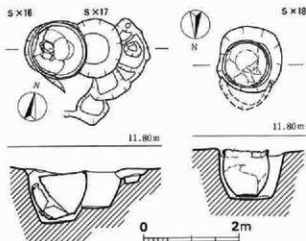


Fig.17 埋甕SX16・17実測図（1/80）

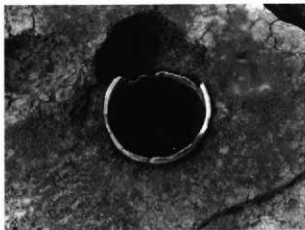


Fig.18 埋甕SX17全景（南西から）

埋甕遺構

SX16 (Fig.16・17)

調査区の北東部で検出した。陶器の半胴甕を埋設したトイレの便槽である。甕（Fig.19）は口唇部を内側に張り出す器形で、底部は平底である。茶褐色の釉を全面に施す。口径59cm・底径24cm・器高43cmを測る。

掘方は壘とほぼ同規模で、東側には同じ様な円形の掘り方があり、作り替えが行われている。遺構の東側一帯は三和土のように良く踏み固められている。地権者の話により、東側の屋外から使用したことが窺え、昭和12年以前の埋甕と判明している。

SX17 (Fig.17・18)

中央北寄りに検出した。土師質の壘を使用した埋甕である。北側の一部を後世の建物の基礎で壊されている。甕（Fig.20）は口径48.5cm・底径25cm・器高49cmを測る。底部は平底で、口縁部は肥厚している。体部の器壁は8mmと薄く仕上っており、内外面は細かい刷毛目が施されている。



Fig.19 埋甕SX16



Fig.20 埋甕SX17

内面には沈殿物が多量に付着しており、便槽として利用されたことが窺える。

掘方は、径65～70cmの円形で、深さ53cmを計測する。SX16より古い時期を考えている。

(3) 遺物の概要 (Fig.21～24)

出土遺物は少く、ほとんどが破片資料である。弥生の土器と石器、中・近世の土師器・陶磁器・瓦などが出土している。1はSP2、2はSK5、3・4はSK9、5～8・16・17はSH12、9～15・18・19はSD14の出土遺物である。

1は逆し字口縁の甕の細片である。胎土は金雲母と多量の長石・石英細粒子を含む。焼成は悪くもろい。二次的な被熱を帯びている。

2は甕の頸部片で、二条の沈線が巡る。胎土は金雲母・長石・石英・赤色粒子を含む。焼成は普通で、二次的な被熱を帯びた可能性がある。前期末から中期初頭。

3は三角口縁の甕の細片である。胎土は金雲母・長石・石英粒子を多量に含む。中期初頭。

4は如意形の甕の突帯部である。突帯の下には明瞭な指圧痕（爪跡）が認められ、煤が付着する。胎土に角閃石・長石の細粒子を含む。前期末から中期初頭。

5は甕の口縁部細片である。口唇部をつまみ出し、刻み目を施す。外面には煤が付着する。金雲母・長石・石英・角閃石を多く含む。前期末。

6は平底の甕の底部片。底径7.4cmを測る。金雲母・長石・石英粒子を多く含む。中期。

7は甕の底部片と思われる。底部は平底で、底径は推定で7cm。二次的に被熱を帯びている。長石・石英粒子を多量に含む。前期末か。

8は甕の底部片。底径は7.2cm。二次的に被熱を帯びている。胎土に長石・石英の粒子を多量に含む。

9・10は土鍋の口縁部片。口唇部に三角の突帯を貼り付けている。10の体部内外面は刷毛目を施す。ともに煤が付着しているが、9には口唇部の上位まで及んでいる。本来、この手の土鍋は中世に多く見られるタイプであるが、筑後地方では近世まで残る可能性が指摘されている。

11・12は染付けの碗である。11はくらわんかタイプの碗で、岩に梅と蝶を描く。高台内には簡素化された大明年製の銘がある。18世紀前半から中葉。12は岩松？を描いている。18世紀前半。

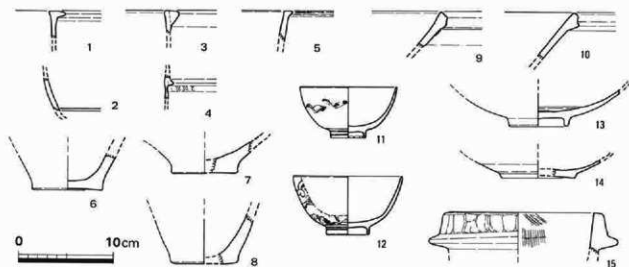


Fig.21 出土遺物実測図① (1/3)

13は陶器の皿で口縁部は欠損。釉は褐釉地に墨灰釉の流し掛けで、高台内まで施釉。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。小石原系で18世紀前半。

14は焼締めのおろし皿。粗い櫛目が全面に施される。備前系か。18世紀代。

15は滑石製石鍋の口縁部片。口縁下に鋸を巡らすタイプ。口縁外部には顕著に削り痕が残り、鍋の下には煤が付着する。口径は17.8cm、鍋径は20.8cmを測る。

16はサヌカイトのドリルで、先端部は一部欠損する。基部には自然面を残す。

17は有孔円盤の未成品。楕円形状を呈する。

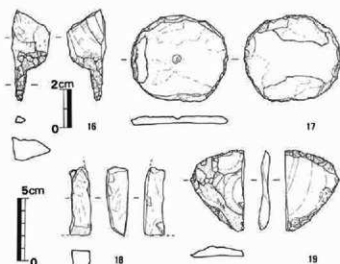


Fig.22 出土遺物実測② (1/2・1/3)

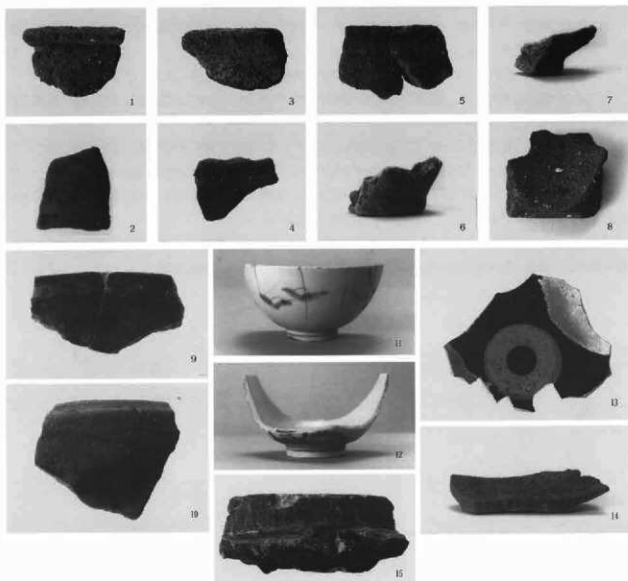


Fig.23 出土遺物①

石材は片岩製である。中央の孔は片方からのみで、貫通していない。周縁部の調整も敲打を加えただけである。

18は方柱状の片刃石斧。砂岩製。

19はサヌカイトのスクレイパーである。

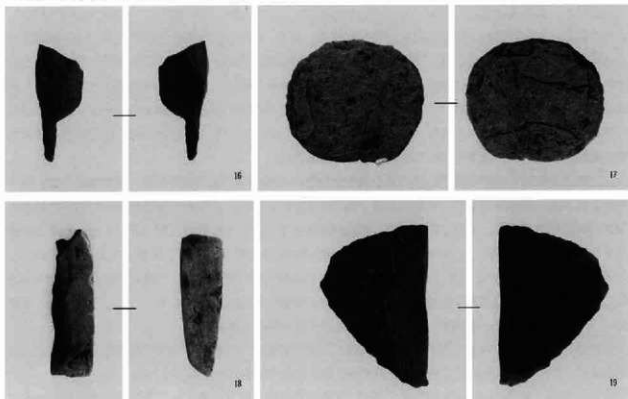


Fig.24 出土遺物②

4. まとめ

今回も狭い範囲の調査であったが、弥生時代の袋状竪穴・竪穴住居跡・墓棺墓、近世の溝や埋蔵遺構などが検出され、幾つかの点について明らかにすることができた。ここでは、これまでの成果を踏まえ、各遺構の要点をまとめてみた。

本調査地点は今寺遺跡の南部に位置する。第1・2次調査地点は調査面積も格段に広く、数多くの遺構・遺物を検出している。これに対し、他の調査地点は調査面積が極めて狭い。その結果、検出遺構も少なく、これと単純に比較できないが、第1・2次調査地点を今寺遺跡の北東端とすれば、第3次調査地点を南端、第5次調査地点を西端とする直径約250mの範囲に遺跡の拡がりが見えてくる。本調査地点は中心（中心は第1・2次調査地点の南西部か）より少し外れた南に位置する地点に当たると言えよう。

長方形の袋状竪穴は、第1・2次調査で11基が検出されている。いずれも前期末の竪穴である。規模は、最大で長辺300cm・最小で170cmと幅があり、一定していないが、長軸方向は北東―南西を示している。これらは、円形竪穴住居の回りに配置されているが、各住居との所有関係は必ずしも明瞭ではない。今回の調査では、大小2基が検出されている。SK5は床面の長辺が180cmでこの範囲に入るが、方向を異にする。長軸は北西―南東の方向を示し、一連の竪穴とは直交関係にある。SK20は長辺80cmと小規模で該当例がなくなや不安が残る。出土遺物も少なく、僅かに弥生土器の細片とサヌカイトの割

片が認められたに過ぎない。しかし、方向はSK5と同一方向を示している。また、壁の立上がりも袋状を呈することから、まず間違いないであろう。いずれも前期末の袋状竪穴と考えている。

竪穴住居は、第5次調査でも同様の住居を検出している。第5次調査のSI2がそれで、495×335cmの規模を有する。中央に炉を、南辺に貯蔵用の土坑を持つ。時期は中期中頃と調査担当者はしている。これに対し、本調査の竪穴住居は、405×255cmの規模でこれより一回り小さい。中央には炉ではなく、支柱柱様のビットがあり、南東部にもビットがある。また、時期は前期末から中期前半で若干時期差が認められる。この今寺地区では、前期の円形住居や中期の長方形住居には中央に炉を持たない（土坑が存在するが炉としての使用は認められない）ことから、SI2の炉は柱穴の可能性もあろうか。また、形状は、前期の円形プランに対し、隅丸長方形で小判形に近い形状である。中期の長方形住居との中間に位置するものと考えられなくてはならない。時期的にも、SI2の時期がクリアであれば、前期末から中期初頭の時期が想定でき、過渡的な住居として符号する様である。

竪穴墓は北東隅に1基を検出した。竪と竪を合わせた中期前半の成人棺である。今寺地区では、第1次調査で3基、第4次調査では4基の合計7基が検出されている。これらの竪穴墓は概ね中期初頭から前半の時期が与えられ、主軸方位は北東—南西方向をしている。出土地点を繋いでいくと、台地の北東部を北東から南西に向かって連続しており、本調査地点はその南西端部に位置するものと考えられる。本遺跡の約250m北東方に位置する石丸遺跡では141基の竪穴墓が検出され、今寺遺跡との関係が指摘されているが、本遺跡でも頻例が増えつつあり、再考の必要が迫られてきている。なお、本遺跡出土の竪穴墓は、これまでに市内で発見された竪穴墓の内では最大級の竪穴墓である。

弥生時代の遺構は、以上の様に北東から南西に向かって分布しており、内側に住居跡や竪穴などの生活遺構が、その外（南東側）に竪穴墓などの墓域が形成されているものと推測される。

近世の溝は、幅約2mの比較的大きな溝で、ほぼ東西方向を示す。第1～3次調査で中世から近世にかけての溝が出土している。特に、約45m隔てた南に位置する第3次調査の溝とはほぼ並行関係にあり、規模・形状も同様である。これらの溝は中世の『榎原荘』との関連が指摘されているが、江戸時代には、この地の土豪榎原氏が太宰府天満宮を勧請したといわれる鎮守社が北東部に隣接することもあり、こうした有力者の屋敷地の区画溝の可能性も考慮に入れる必要があろう。

参考文献

『久留米市史』第1巻 昭和56年

『久留米市史』第12巻 資料編考古 平成6年

『久留米市内遺跡群』 久留米市文化財調査報告書第97集 平成7年

II. 正福寺遺跡 (第3次)

1. はじめに

本調査は、平成9年6月3日、[REDACTED]氏より久留米市国分町字日渡931-15における、専用住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡である正福寺遺跡の範囲内に含まれるため、同年6月6日に市教育委員会では試掘調査を実施した。その結果、南北に走行する溝や、土師器・縄文土器などの散布が認められたため、当該地に遺跡が存在する旨を地権者に通達した。協議の結果、現地表面から遺構検出面までは約20cm、一方、基礎工事による掘削は1m以上に達するため、盛土等による保存は困難であり、やむを得ず発掘調査による記録保存をすることとなった。

調査は、対象面積255㎡の内、家屋建設範囲の38㎡を対象として、平成9年6月18日～同6月25日まで実施した。

2. 位置と環境

正福寺遺跡は、飛岳から西へ派生する標高約30mの低台地上に位置する。南北には名入川・桃太郎川の開析が見られ、遺跡の立地する台地はわずかに舌状に張り出した状況を呈しているが、周辺の谷部との比高差は1mにも満たない。

正福寺遺跡周辺は、縄文土器が広く散布する日渡遺跡群として知られている。一帯では中期の阿高式、後期の小池原上層式、北久根山式、晩期の粗製土器などが多く採集され、大集落の存在を匂わせているものの、本格的な縄文集落の発掘調査が実施されていないために様相は明らかでない。また弥生時代の資料では後期土器の出土が見られるが、前時代同様、今一つ判然としない。

古墳時代になると東方の丘陵部には多くの古墳が築かれるようになる。全長110mの石櫃山古墳、石障を持つ初期横穴式石室の藤山甲塚古墳、妻入横口式石棺内に線刻文様を施す浦山古墳などの大型の前方後

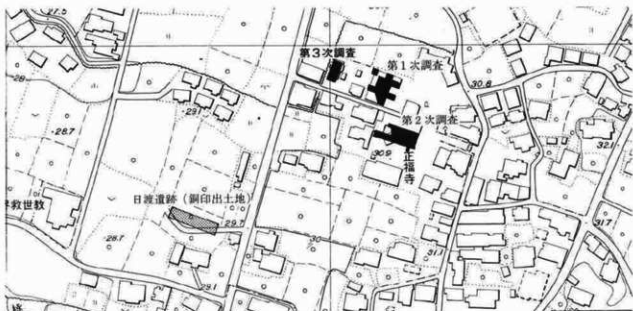


Fig.25 正福寺遺跡第3次調査 調査区位置図 (1/2500)

円墳や、^{やわみず}縄水古墳群に見られるような石棺系竪穴式石室など小規模な墳墓が5世紀中頃以降、継続して営まれている。

奈良時代になると北方500mの低台地上に筑後国分寺が置かれる。筑後国分寺は講堂と塔の一部、及び周辺域の調査が断続的に実施されているが、配置などの全容は今一つ明らかでない。特に回廊の有無については検討の余地が残されている。南西に位置する日渡遺跡では平成5年度の調査で10世紀初めの土坑から「甕」の印文が鑄出された菅紐有孔型の銅印が出土した。印文の持つ意味については不明であるが、正福寺の創建者とされる^{くさかへ}草部氏との関連も考えられている。その他、円遺跡からは越州系系青磁碗や長沙系黄釉褐彩水注、鉄鏝等も出土している。

また正福寺遺跡から北方に位置する筑後国府までは直線にしてわずか2.5kmという至近距離にあり、徒歩にして30分程度で到達可能である。先述した日渡遺跡や筑後国分寺と国府とを結ぶルート上に立地する本遺跡は、古代における重要な位置を占めていたものと考えられる。

正福寺遺跡に関する主要参考文献

- 久留米市教育委員会「正福寺遺跡」久留米市文化財調査報告書第16集 1977年
- 久留米市教育委員会「日渡遺跡」久留米市文化財調査報告書第85集 1993年
- 久留米市教育委員会「平成8年度久留米市内遺跡群」久留米市文化財調査報告書第16集 1997年
- 久留米市史編さん委員会「久留米市史」第1巻 1981年
- 久留米市史編さん委員会「久留米市史」第12巻 資料編（考古） 1994年



Fig.26 正福寺遺跡を中心として見た周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

3. 調査の記録

（1）調査の概要

6月18日より重機による表土剥ぎを開始。午後より発掘機材の搬入。作業員を投入し、遺構の検出作業を行う。遺構の密度は低く、すぐにピットの掘り下げを開始。19日には遺構の掘り下げを終え、調査区の清掃後、全景写真撮影を実施。トータルステーションによる遺構測量と並行しつつ、縄文土器包含層の掘り下げを行う。後・晩期の土器や黒曜石の剥片が多く出土した。遺物取り上げ後、25日には調査区の埋め戻しを行い、調査を終了した。記録写真は、カラーリバーサル35mm、モノクロ35mm・6×7で撮影した。なお、トータルステーションで測量した遺構図は、遺跡調査汎用システム（カタタ3DC）に記録・保存されている。

（2）遺構の概要

現地表面から20cm程度で、黄褐色シルトの遺構検出面に達する。この黄褐色シルト層表面には縄文土器や石器剥片が露出し、これよりさらに20cm程度で黄色土層（埴山）に至る。検出面では近～現代の攪乱が各所に見られ、歴史時代以前の遺構と認識できたのは、溝1条とピット12基のみであった。



Fig.27 基本層序

また、調査区の西側半分についてはⅡ層の掘り下げを行い、縄文土器や石器を検出した。

溝

SD10 (Fig.29・30) 調査区中央で検出した溝で、幅40～50cm、深さ10cmの断面逆台形を呈する。埋土は柔らかい黒色土である。また底面のレベル差ではわずかに北から南へ移行するに従って深みを増すようである。走行方向はN-20度-Eで、第2次調査で検出された溝（SD40）及び掘立柱建物（SB1）と概ね同一方位を示す。出土遺物には土師器皿（へら切り底）1点と須恵器壺1点以外では縄文土器と石器剥片が認められるのみであった。

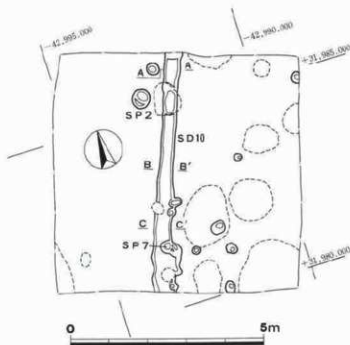


Fig.28 正福寺遺跡第3次調査 遺構配置図 (1/100)



Fig.29 SD10完掘状況（南から）

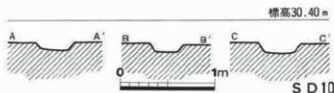


Fig.30 SD10断面実測図 (1/40)

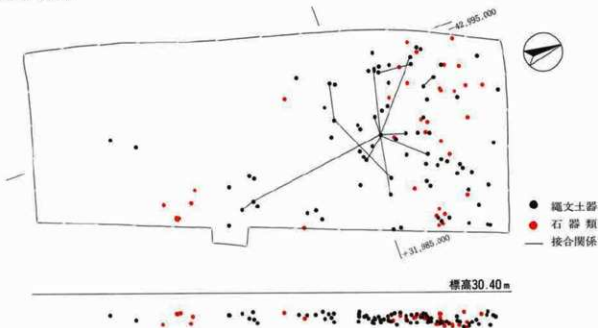


Fig.31 II層内の遺物出土分布図 (1/50)

(3) 遺物の概要

出土遺物は、II層出土の縄文土器・黒曜石剥片が圧倒的多数を占め、それ以外では土師器と須恵器の細片が数点見られるに過ぎない。4・18がSD10、11がSP2、17がSP7出土で、それ以外は全てII層からの出土。

1～16は縄文土器で、1～5が後期、6～16が晩期の所産と考えられる。1は浅鉢で胴部に縄文と凹線による文様帯を施した後、一部を磨消す。2は鉢で口唇部に縄文を施す他は内外面ともにミガキ。胎土に多量の角閃石を含む。3は波状口縁の深鉢で、山は3箇所に復元でき、底部は脚台となる。山の端部には短直線文を施し、口縁部および脚台には擬似縄文、それ以外はミガキを丁寧に施す。4は口唇部に短直線文を施す。5は胴部片と考えられ、短直線文を施す。6・7は口縁部で内外面ともに条痕が施される。8～10は胴部片で内外面とも条痕が施されるが、8の内面は丁寧なミガキが施される。11は端部をわずかに欠くが口縁部と考えられる。12は浅鉢で内外面ともに丁寧なミガキを施す。口径約18cmとやや小振りであるが古閑式段唇に相当するものと思われる。13は内面に1条の沈線を施す、古閑式＝黒川式に相当。14・15は鉢の底部で、15は浅鉢の可能性ある。16は鉢で体部は直線的に大きく開き、内面は丁寧なミガキが施される。17は土師器虎で外面の凹凸は顕著である。18は須恵器の甕の胴部片である。



Fig.32 II層遺物出土状況（南から）



Fig.33 II層遺物出土状況（南から）

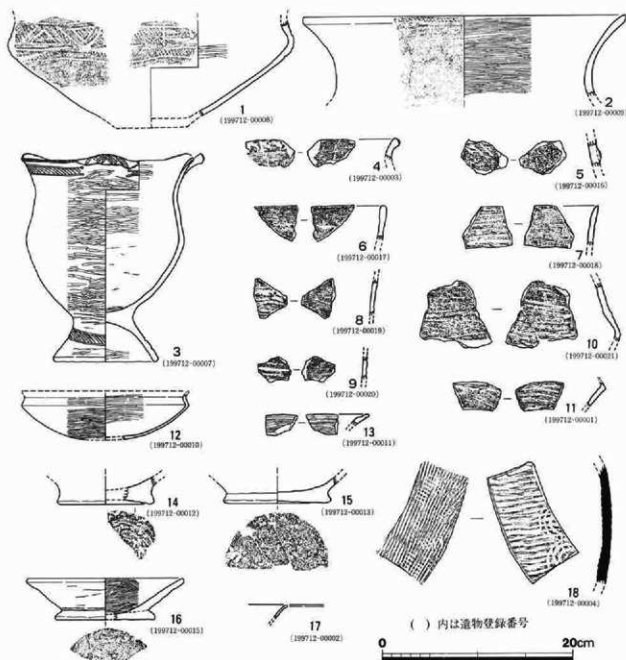


Fig.34 出土遺物実測図 (1/4)

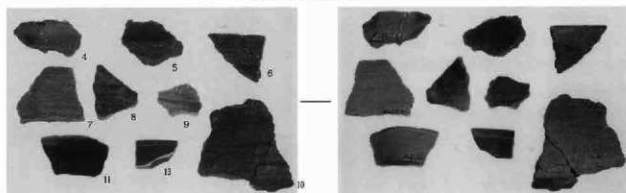


Fig.35 出土遺物①

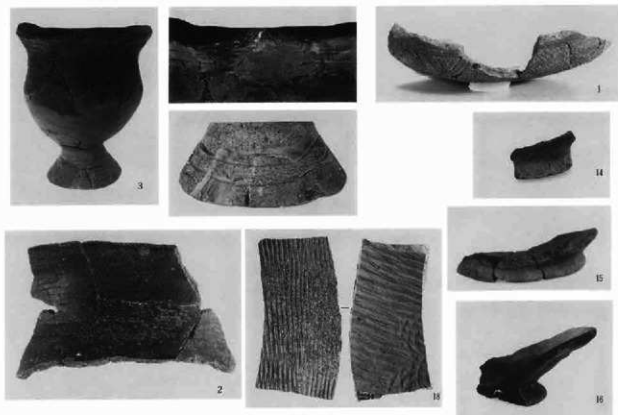


Fig.36 出土遺物②

4. まとめ

今回の調査では、歴史時代の溝と縄文土器が検出された。前者については遺物が少なく多くを語れないが、9世紀前半の創建と伝えられる正福寺に関わる溝と考えることができよう。

次に縄文時代の遺物を見てみると、70点余り出土した縄文土器の内訳は、胎土に滑石粉末を含む中期の阿高式と考えられるもの1点を除けば全て後・晩期の資料で占められ、晩期の粗製土器が最も多く出土した。後期の土器はほぼ北久根山式の範疇に含まれるものと思われる。特に3の深鉢は底部から口縁部までの全容が窺え、類例の少ない北部九州においては貴重な発見となった。一方で波状口縁の山部が類似資料が4箇所に施される例が多いのに対し、本資料は文様構成や口径から見る限りでは山部が3箇所に復元可能であり、類例の増加が待たれる。石器類の内訳は黒曜石刻片32点、サヌカイト刻片1点、石皿2点で黒曜石の占める割合が多い点が目付いた。

縄文土器について、水ノ江和同氏（福岡県農畜教育事務所）よりご教示を頂いた。記して感謝いたします。



Fig.37 正福寺遺跡第3次調査区全景（南から）

Ⅲ. 西屋敷遺跡（第3次）

1. はじめに

本遺跡は、久留米市合川町宇南屋敷1961-1～3に所在する。字名は南屋敷で表示されているが、過去に実施した調査の成果に基づくと、字界を超えた広がりを持つ遺跡と考えられるため、西屋敷遺跡として取り扱った。

調査に至る経過は、平成9年1月22日に当該地の地権者である[]氏から、専用住宅建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出された。これを受け、試掘調査を行った結果、遺構・遺物を確認し、地権者に当該地が埋蔵文化財の包蔵地であると回答した。その後、協議を経て平成9年7月22日に発掘調査を着手する運びとなった。

調査期間中は、雨や盆休みが入り、予想以上に時間を費やした。9月5日に漸く現地における調査を終了した。

2. 位置と環境

西屋敷遺跡は、通称、市ノ上台地の北西端に広がる。市ノ上台地は、耳納山地の西端に位置する高良山(312m)から北西に広がる洪橋台地の先端に当たる。

現在の地形からも旧状を偲べる部分を残すものの、大半は宅地化が進んでいる。特に遺跡の北側から西側にかけては、昭和37年からの一大総合公園建設事業に伴い、市営球場や県立体育館・陸上競技場・青少年科学館・中央公園といった公共施設が建設され、蓮根堀であった旧地形の面影は完璧になくなっている。また、周辺には筑後川を望む低位段丘に数々の遺跡が分布する。

本遺跡の東側には高良川の東岸には、弥生時代後期初頭～終末の住居が検出された古宮遺跡、筑後国府跡第1期（古宮地区）が立地し、市ノ上台地より西側で筑後川に張り出した檜原台地上には、南薫稻荷遺跡・石丸遺跡といった甕棺墓が集中した弥生時代前期～中期の遺跡や、弥生時代前期後半の竪穴住居が検出された東檜原今寺遺跡が連なって存在する。市ノ上台地の先端には北屋敷遺跡があり、前期後半～中期の竪穴住居や甕棺が検出されている。

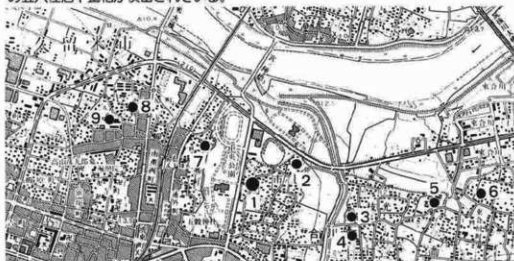


Fig.38 遺跡分布図 (1/25,000)

1. 西屋敷遺跡
2. 北屋敷遺跡
3. 大林遺跡
4. 筑後国府跡第1期
5. 御蔵園遺跡
6. 西小路遺跡
7. 南薫稻荷遺跡
8. 石丸遺跡
9. 東檜原今寺遺跡



Fig.39 周辺地形・調査地点位置図 (1/5,000)



Fig.40 西屋敷第0次調査 (南から)



Fig.41 西屋敷第1次調査 (北西上空から)



Fig.42 西屋敷第2次調査 (北上空から)



Fig.43 北屋敷第4次調査 (北東から)

3. 調査の記録

(1) 調査の概要

今回の調査は、専用住宅建設に先立って実施した調査である。対象地の面積は622m²で、その全域を調査の対象にした為、調査区を南北に分けて行う方法を取った。試掘調査のデータを参考に、南区から調査を実施した後、北区へと移った。また、谷状遺構の状態を確認するために4か所にサブトレンチを設定した。



Fig.44 トータルステーションによる測量風景 (南東から)



Fig.45 調査トレンチ位置図 (1/400)

西屋敷遺跡第1次および第2次調査の成果を踏まえ、複合遺跡の状況に対応できるように調査を展開した。また、調査のスピードアップを図る為、発掘した遺構は、その傾度トータルステーションを用いて測量し、編集した後にパソコンによる図化を行った。調査トレンチの総面積は390m²であった。

(2) 遺構の概要

調査区の南西側は既に削平を受け、遺構の残存状態は極めて悪い。北区の東側には黒褐色粘質土が広がり、幾度となく遺構検出の作業を繰り返し行った。その結果、検出し



Fig.46 北区全景 (南西から)



Fig.47 南区全景 (北西から)

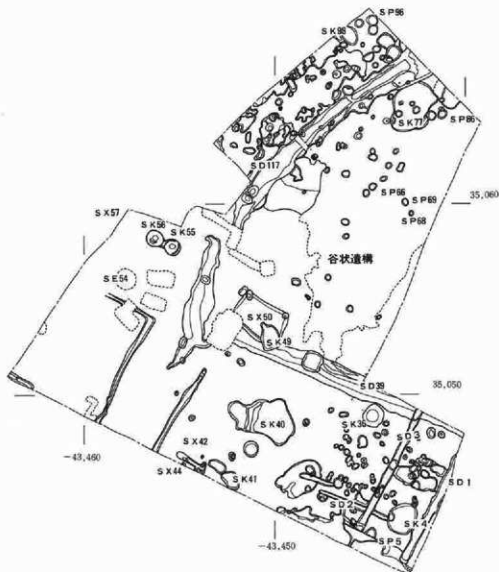


Fig.48 遺構配置図 (1/200)

主な遺構は、溝6条、土坑9基、井戸1基と谷状遺構1条である。

SD 1 (Fig.49)

南区の東端に位置し、走行方位は南北を示す。上端幅36~45cm、下端幅34cm、深さは8~15cmを測り、底面は平坦である。茶褐色砂質土の埋土から磨滅した土師器や近世陶磁器が出土した。

SD 2

南区の南東側で検出した東西走向の溝である。上端幅20~30cm、下端幅13~21cm、深さ8~12cmの規模を持つ。底面は平坦で、東から西へと標高を下げる。黒褐色砂質土の



Fig.49 SD 1 土層・完脱状態（南西から）

埋土には土師器・須恵器片、近世陶磁器片が包蔵されていた。

SD3

SD2を切る南北走向の溝で、上端幅28~44cm、下端幅17~35cm、深さ5cmを測る。淡黒褐色砂質土から磨滅した土師器片と近世陶磁器が出土。



Fig.50 SD39土層状態 (北西から)



1. 灰褐色砂質土
2. 灰褐色砂質土(遺物・炭混入)
3. 暗茶褐色砂質土(遺物・炭混入)
4. 明黒褐色砂質土
5. 黒褐色砂質土(緻密)

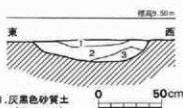
Fig.51 SD39土層図 (1/30)

SD39 (Fig.50・51)

南区の北端を東西に走向する溝である。溝上端幅116cm、下端幅38cm、深さ41cmの規模を示し、断面形状は台形状を呈する。第2・3層から弥生土器・土師器・近世陶磁器が出土している。南壁面は北壁よりも急な傾斜を呈する。

SD117 (Fig.52)

北区の西側を南北に走行する。溝上端幅90~120cm、下端幅40~90cm、深さ15~30cmを測る。埋土は自然堆積で、第1・2層から遺物の出土をみた。溝は北端で谷状遺構に落ち、さらに北へは延びないと思われる。土師器、須恵器、輸入陶磁器、近世陶磁器が出土した。

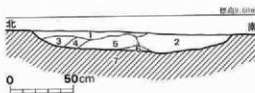


1. 灰黒色砂質土(白磁出土)
2. 黒褐色砂質土(土師器出土)
3. 青黒色砂質土

Fig.52 SD117土層図 (1/30)

SK4 (Fig.53・54)

南区のSD1の西隣で検出した土坑である。長軸173cm、短軸149cmの楕円形を呈する。深さは13cmでやや撓鉢状をなすが底面には緩やかな起伏を有する。埋土からの遺物は、磨滅した土師器、須恵器、近世陶磁器が出土している。SD2を切る。



1. 黒褐色砂質土(軟質土)
2. 黒褐色・黄色・黄褐色粘土
3. 明黒褐色砂質土(地山混入)
4. 暗黒褐色砂質土
5. 黄色・黄褐色粘土
6. 黄色粘土ブロック
7. 黄白色粘土(地山)

Fig.53 SK4土層図 (1/30)



Fig.54 SK4土層・完掘状態 (北西から)

SK41・SK42 (Fig.55・56)

両遺構共に南区の中央南端で、表土剥ぎの際に遺物と遺構の埋土を僅かに検出した。遺物は遺構の底面に接していたものであろう。SK41は弥生土器の口縁~胴部片が南北に並んだ状態で出土し、SK42は弥生土器口縁と胴部片が上下に重なって出土した。前者はかすかに掘形を看取できたものの、後者においては掘形すら確認できなかった。



Fig.55 SK41遺物出土状態 (北東から)



Fig.56 SK42遺物出土状態 (北東から)

S K 36 (Fig.57・58)

南区の東側北端で検出した土坑である。黒褐色砂質土が検出面から底面まで入り、底面から約15cm付近に15～20cm大の角礫が散在していた。廃絶の際、一気に埋め戻されたと考えられる。規模は長軸115cm、短軸108cm、深さ60cmを測る。平面形はほぼ円形を呈し、壁面状態は検出面から15cm程の深さに稜を有し、直に近い角度で掘り込まれている。底面は約70cmの径を有し、ほぼ平端を呈する。上面から底面に至るまで遺物が出土している。遺物は土師器が100

点程出土し、須恵器・陶磁器は数点であった。また、焼けた粘土塊が約70点出土している。土師器の小皿の底部にはへう切り離し痕跡を残す

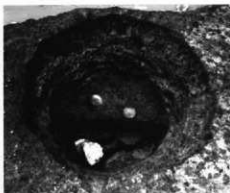


Fig.57 S K 36遺物出土状態（南東から）

ものが大半であったが、糸切り離しの小皿が1点認められた。

S K 55・56 (Fig.59)

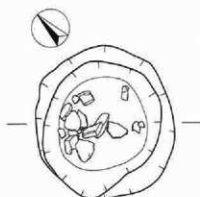
南区の西側北端で検出した。双方とも76～88cmの径を有する円形の土坑である。深さは53cm、底面径は約30cmと揃えている。両者間隔は18cmで、溝状の掘り込みで結ばれる。S K 55の埋土から土師製の甕片が出土したが、S K 56から遺物の出土はない。

S K 98 (Fig.60)

北区の北西隅で検出した。短軸77cm、長軸は検出長105cmを測る。20cm程の深さで底面に達し、底面には5～10cm大の円礫を敷きつめていた。遺物は土鍋片と青磁碗片が数点出土している。

谷状遺構

北区の東側一帯に黒褐色粘質土が広がる。4か所にサブトレンチを設け、埋土の層序の観察を行った。各トレンチの深さは、南トレンチで13～17cm、中央トレンチで36～50cm、北トレンチ2で48～62cm、北トレンチ1では60～80cmを測り、北へ向かって標高を次第に下げている様子を認めることができた。また、層序は底面に砂質土が堆積し、その後、粘質土が堆積している。底面の状態は不均一な起伏を有し、東西から緩やかに傾斜する。遺物はどの層からも出土したが、粘質土中より弥生時代中期～後期の甕・高坏・鉢・器台・壺などが出土している。これらの遺物は台地の上部から流れ込んだものと考えられる。この谷は調査区より北へと延びており、その方



縦高0.60m



Fig.58 S K 36実測図 (1/30)



Fig.59 S K 55・56発掘状態（北東から）



Fig.60 S K 98発掘出土状態（北東から）

向はやや西に曲がって低湿地(筑後川の氾濫原)へと向かうと推測される。

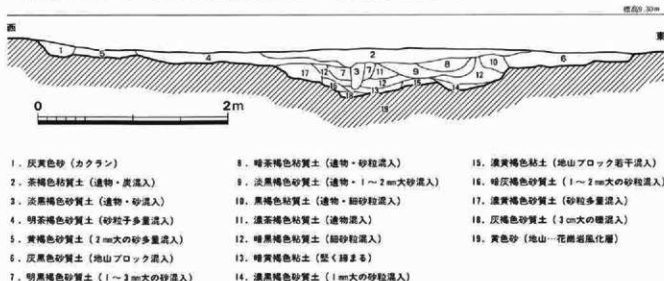


Fig.51 谷状遺溝中央トレンチ土層実測図(1/40)

(3) 遺物の概要

今回の調査において出土した遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、黒色土器、須恵器、白磁、青磁、土師質土器、近世陶磁器、瓦、石器など、バンコンテナーに約10箱分を数える。縄文時代から近世・現代に至るまでの遺物が出土し、複合遺跡である西屋敷遺跡の略図を見るようである。

遺物の法量・調整・特徴等は、後頁にまとめて記載した観察表を参照していただきたい。

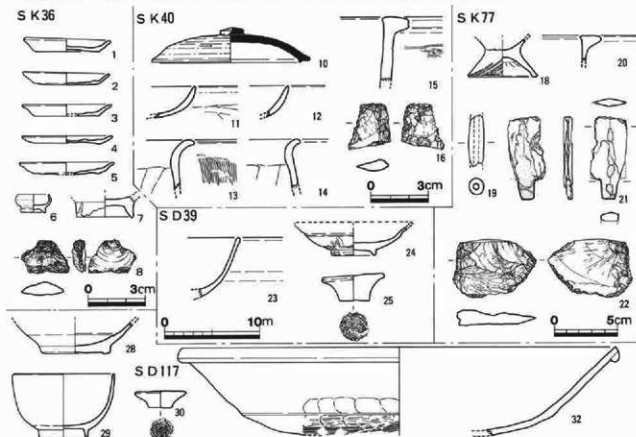


Fig.52 出土遺物実測図①(1/4・1/2)

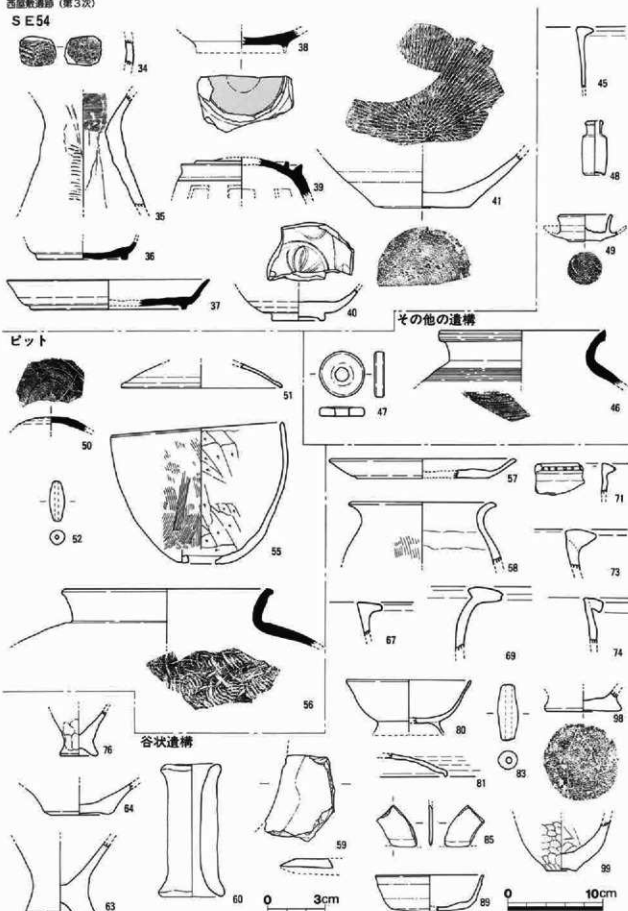


Fig.63 出土遺物実測図② (1/4・1/2)

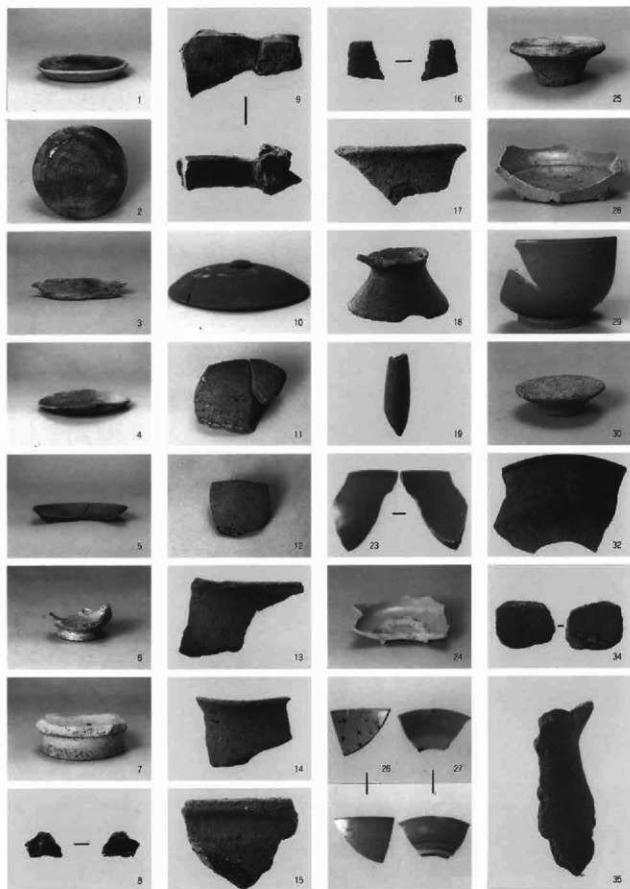


Fig.64 出土遺物①

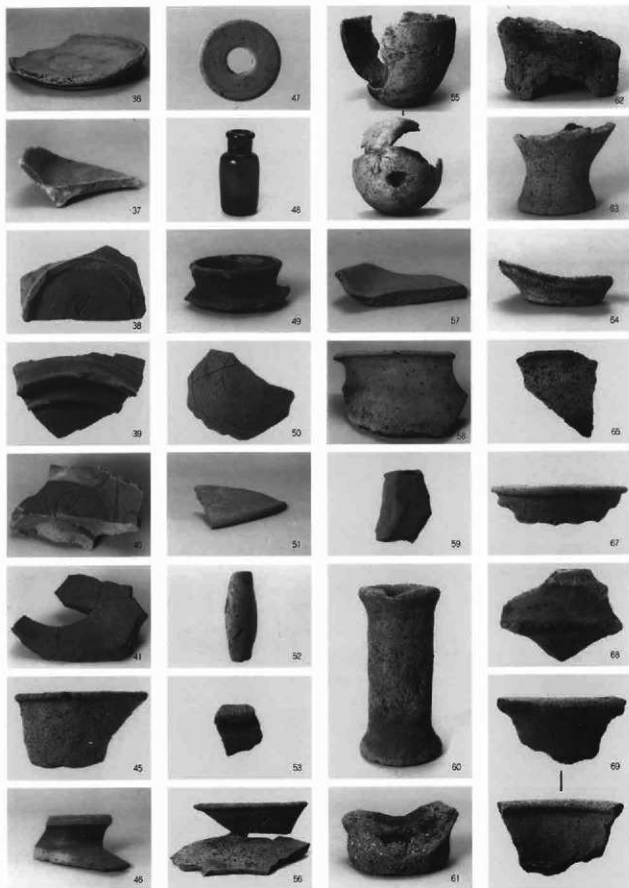


Fig.65 出土遺物②

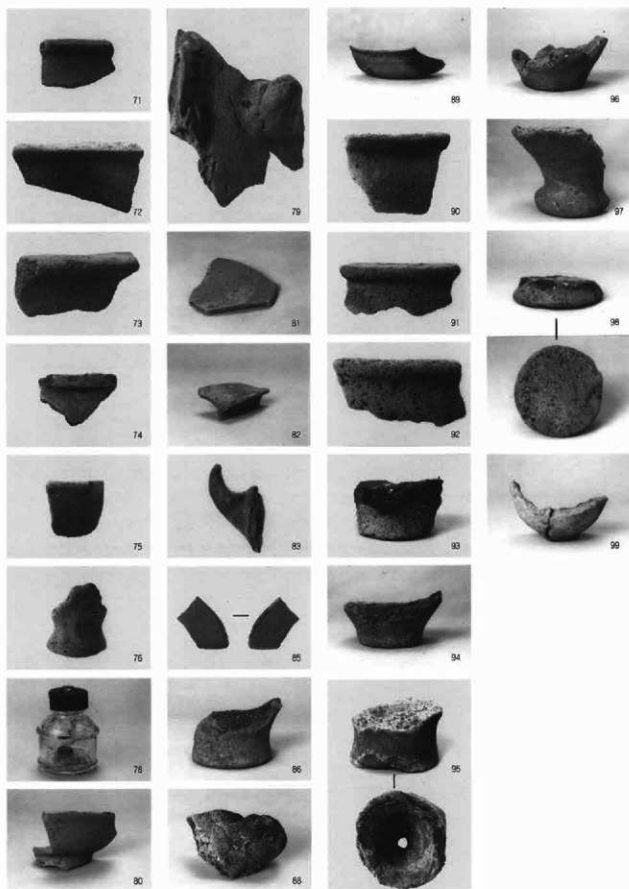


Fig.66 出土遺物③

Tab.1 遺物観察一覧表①

Fig No.	出土遺構	器種	法 器 (cm)			調 査			胎 土	色 調	焼成	備 考	記録番号
			口径	底径	器高	外 面	内 面	底 面					
62-64 1	SK36	土師器 小皿	9.1	6.8	1.2~1.5	回転ナデ	回転ナデ	糸切り板目瓦類	金雲母、赤色粒子1mm前後の砂粒を含む	赤褐色、赤褐色、暗灰色	良好	内面に油煙付着	199714 00025
62-64 2	SK36	土師器 小皿	9.1	6.9	1.2~1.4	回転ナデ	回転ナデ	糸切り板目瓦類	赤色粒子、金雲母	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00029
62-64 3	SK36	土師器 小皿	10.0	7.1	1.35	回転ナデ	回転ナデ	糸切り板目瓦類	金雲母、赤色粒子	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00030
62-64 4	SK36	土師器 小皿	9.4~9.6	7.0~7.3	0.9	回転ナデ	回転ナデ	糸切り板目瓦類	金雲母、1~7mmの砂粒を多く含む	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00028
62-64 5	SK36	土師器 小皿	10.0	7.1	1.35	回転ナデ	回転ナデ	糸切り板目瓦類	金雲母、赤色粒子	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00031
62-64 6	SK36	白磁 合子	3.2	2.7	1.9	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒を意む白磁	青白色	良好	層付は露胎	199714 00024
62-64 7	SK36	白磁 碗	6.0	(2.3)		回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒子を意む白色精良	青白色	良好	層を打ち欠いて底部のみを作出	199714 00027
62-64 8	SK36	黒曜石 羽目	1.75	0.65	25								199714 00032
64 9	SK36	滑石 石皿	(6.2)	2.4~3.5		クスリ	クスリ					加工面跡有 未完成	199714 00026
62-64 10	SK40	須恵器 皿	14.7		3.7	回転ナデ	回転ナデ		2mm前後の砂粒を含む	赤褐色、赤褐色	やや良好		199714 00043
62-64 11	SK40	土師器 杯			(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	手持ちクスリ	赤色粒子、細砂粒	暗褐色	良好		199714 00039
62-64 12	SK40	土師器 杯			(3.3)	回転ナデ	回転ナデ	手持ちクスリ	赤色粒子、細砂粒	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00040
62-64 13	SK40	土師器 鉢			(5.4)	回転ナデ	回転ナデ	前毛目	金雲母、1~3mmの砂粒、黒色の角閃石を含む	暗褐色	良好		199714 00041
62-64 14	SK40	土師器 鉢			(5.2)	回転ナデ	回転ナデ	前毛目	金雲母、赤色粒子、細砂粒を含む	赤褐色	良好		199714 00042
62-64 15	SK40	弥生土器 鉢			(6.8)	回転ナデ	ナデ	前毛目	1~3mmの砂粒を多量に含む	赤褐色、赤褐色	良好	口縁下に1本の筋	199714 00038
62-64 16	SK40	サヌカイト 羽目	2.4	0.65	2.2								199714 00044
64 17	SK41	弥生土器 鉢			(6.1)	回転ナデ	回転ナデ		1~2mmの砂粒を多く含む	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00037
62-64 18	SK77	土師器 器台		7.4	(4.0)	ナデ	ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒、多量の角閃石を含む	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00054
62-64 19	SK77	土師器 土器	(5.5)	1.7	1.65	ナデ			赤色粒子、金雲母	赤褐色	良好		199714 00055
62 20	SK77	弥生土器 鉢			(2.7)	回転ナデ	ナデ		1~3mmの砂粒、金雲母	赤褐色	良好		199714 00066
62 21	SK77	緑 葉 片 岩 石 鉢	8.72	0.88	3.62							保存状態不良	199714 00068
62 22	SK77	サヌカイト 羽目	4.5	1.25	6.5								199714 00067
62-64 23	SD39	青磁 碗			(6.2)	回転ナデ	回転ナデ		細砂粒を意む明灰色 (やや粗い)	明褐色	やや良好		199714 00033
62-64 24	SD39	陶器 皿		4.8	(3.0)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	白色精良	赤褐色	良好	見込は粗ノ目粒付	199714 00035
62-64 25	SD39	陶器 ハマ	6.6	3.0	2.5~2.9	回転ナデ		糸切り	細砂粒を含む	赤褐色、赤褐色	良好	上面に砂付着	199714 00034
64 26	SD39	陶器 碗			(4.7)	回転ナデ	回転ナデ		陶胎	白灰色	良好	朝霞状か	199714 00036
64 27	SD39	陶器 染付皿			2.5	回転ナデ	回転ナデ			乳灰色	良好	瀬戸、美濃系	199714 00037
62-64 28	SD117	白磁 鉢		7.6	(3.4)	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒子を含む白色精良	淡緑灰色	良好	体部下半~肩台部露胎	199714 00071
62-64 29	SD117	陶器 鉢	10.8	5.2	6.8	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒を含む黄白色精良	暗褐色	良好	層付露胎	199714 00075
62-64 30	SD117	陶器 ハマ	5.5	2.5	1.8	回転ナデ		糸切り	細砂粒を含む	明褐色	良好	上面に砂付着	199714 00072
31	SD117	陶器 変形皿			(2.0)	回転ナデ	回転ナデ			黒褐色	良好	層付	199714 00076
62-64 32	SD117	土師器 土器	46.6		(9.3)	回転ナデ	前毛目	前毛目	細砂粒、多量の金雲母を含む	赤褐色、赤褐色	良好	内底面に灰化層付着	199714 00073
33	SD117	土師器 土器			(12.5)	前毛目	前毛目	前毛目	細砂粒、金雲母を含む	赤褐色、赤褐色	良好		199714 00074

Tab2 遺物観察一覧表②

Fig No	出土遺構	器 種	法 量 (cm)			調 整			胎 土	色 調	焼 成	備 考	登録番号
			口径長	底径厚	器底幅	外 面	内 面	底 面					
63-64 34	SE54	縄文土器 鉢			(3.1)	茶褐色	ナデ		1~3mmの石英・金雲母を含む	暗褐色	良好	鎌崎式	199714 00051
63-64 35	SE54	土 器 器 台 片			(12.0)	刷毛目か コテ当痕	刷毛目		細砂粒・微量の角閃石を含む	暗灰褐色	良好		199714 00050
63-65 36	SE54	消形器 杯	9.7	2.0		回転ナデ	回転ナデ	ヘラ切り	微砂粒を含む	淡灰色	良好	内底部磨減 断面用脱力	199714 00052
63-65 37	SE54	消形器 皿	21.4	16.6	3.2	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	1~3mmの砂粒を含む	淡黄灰色	良好	内底部磨減 断面用脱力	199714 00054
63-65 38	SE54	消 形 器 器 台 片	10.4	(1.9)		回転ナデ	ナデ	回転ナデ	1~3mmの砂粒を含む	赤褐色 赤灰褐色	良好	外底部を横 に転用	199714 00053
63-65 39	SE54	消 形 器 内 面 視	12.7		(4.2)	回転ナデ 回転ナデ	ナデ		細砂粒を含む	灰 色	良好	底部に透し	199714 00046
63-65 40	SE54	青磁 鉢		5.7	(3.4)	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒を含む 淡灰色精製	淡緑青色	良好	龍泉窯系	199714 00049
63-65 41	SE54	青磁 罐鉢		10.1	(5.8)	回転ナデ		糸切り	細砂粒を含む	(断面、内、外面) 暗褐色	良好	鎌目11木、 3.5cm	199714 00055
42	SE54	砂岩 磁石	(11.0)	(3.9)	(8.7)							3面磨減 被熱	199714 00056
43	SE54	砂岩 磁石	(10.4)	(4.0)	(3.2)							1面磨減	199714 00057
44	SE54	砂岩 磁石	(4.2)	(4.1)	(5.7)							2面磨減	199714 00058
63-65 45	SK42	弥生土器 甕			(6.5)	回転ナデ ナデ	ナデ	指頭押圧	1~4mmの砂粒を多量 に含む	赤灰褐色 赤黄褐色 赤黄褐色	良好		199714 00098
63-65 46	SK48	消形器 甕	17.6		(5.8)	回転ナデ 力キ自	回転ナデ		細砂粒を含む	灰 色	良好	底部に自然 給	199714 00045
63-65 47	SK48	甕 戸串	4.8	0.95		甕の外縁 に当り			微砂粒を含む 白色精製	白 色	良好	孔径1.45cm	199714 00046
63-65 48	SK60	ガラス製 器	1.9	2.4	5.7					茶 色			199714 00047
63-65 49	SK67	陶器 灯明皿	10.4	(1.9)		回転ナデ	回転ナデ	糸切り	1~3mmの砂粒を含む	赤褐色	良好	鉢鉢	199714 00059
63-65 50	SP5	消形器 蓋			(1.5)	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ ナデ		微砂粒を含む	赤灰色 赤黄褐色	やや 良好	天井部にへ つり	199714 00023
63-65 51	SP66	土器 甕	17.0		(2.6)	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ		赤色粒子・金雲母を含む	淡褐色	良好		199714 00060
63-65 52	SP66	土製品 土鍋	5.3	1.65	1.6	ナデ			赤色粒子 金雲母	淡褐色 黒色	良好		199714 00061
65 53	SP68	弥生時代 甕			(4.1)	回転ナデ ナデ	ナデ		1~2mmの砂粒を多く 含む	赤褐色 赤灰褐色	良好		199714 00062
54	SP69	砂岩 磁石	(15.1)	7.3	(6.8)							2面磨減 被熱スス付	199714 00063
63-65 55	SP66	土器 鉢	18.2	13.7~ 15.0		回転ナデ 刷毛目	クズリ	ナデ	1~7mmの砂粒を含む	赤褐色 赤褐色	良好	底部に穿孔	199714 00069
63-65 56	SP66	消形器 甕	22.3		(6.0)	回転ナデ	回転ナデ	タタキ	細砂粒を含む	赤灰褐色 赤黄褐色	良好		199714 00070
63-65 57	北トレンチ	土器 皿	19.8	16.0	2.1	回転ナデ 回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	金雲母・赤色粒子 微砂粒	淡褐色	良好		199714 00077
63-65 58	北トレンチ	土器 甕	15.6		(6.6)	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ	回転ナデ	1~2mmの砂粒金雲母	赤灰褐色 暗褐色	良好		199714 00078
63-65 59	北トレンチ	粘板岩 石剣	(4.5)	(0.5)	(3.3)							刷 磨	199714 00079
63-65 60	北トレンチ	弥生土器 器台	6.4	7.0	14.0	回転ナデ 指頭押圧	ナデ		1~4mmの砂粒多量の 角閃石を含む	黄褐色 暗褐色	良好		199714 00080
65 61	北トレンチ	弥生土器 甕	7.0	(3.9)		ナデ	ナデ	ナデ	角閃石・金雲母 砂粒を多く含む	黄褐色	良好		199714 00081
65 62	北トレンチ	弥生土器 甕	7.1	(5.2)		ナデ	ナデ	ナデ	1~3mmの砂粒 角閃石を多く含む	赤褐色	良好		199714 00082
63-65 63	北トレンチ	弥生土器 甕	7.2	(7.7)		回転ナデ	ナデ	ナデ	角閃石・1~3mmの砂 粒を多量に含む	赤褐色 赤黄褐色	良好		199714 00083
63-65 64	北トレンチ	弥生土器 甕	7.3	(3.4)		回転ナデ	ナデ	ナデ	角閃石・1~3mmの砂 粒を多量に含む	黄褐色	良好		199714 00084
65 65	北トレンチ	弥生土器 鉢			(7.5)	回転ナデ ナデ	ナデ		1~4mmの砂粒を多量 に含む	黄灰色	良好		199714 00085
66	北トレンチ	弥生土器 甕			(3.4)	ナデ	ナデ		角閃石・角閃石を含む	暗褐色	良好		199714 00086

Tab3 遺物観察一覧表③

FIG No.	出土遺構	器種	法 量 (cm)			面 積			胎 土	色 調	焼成	備 考	登録番号
			口径長	底径	器高幅	外 面	内 面	底 面					
63-65	北トレンチ	弥生土器 甕			(3.7)	回転ナデ	回転ナデ		金雲母・角閃石13mmの砂粒を多量に含む	暗黄褐色	良好		1997/4 00067
65-66	北トレンチ	弥生土器 甕			(8.0)	ナデ	ナデ		角閃石・長石・石英砂粒を多量に含む	茶褐色～黄褐色	良好	三角状帯に刻目	1997/4 00088
63-69	北トレンチ	弥生土器 甕			(6.8)	回転ナデ	回転ナデ		金雲母・角閃石1～3mmの砂粒を多量に含む	暗黄褐色	良好		1997/4 00089
70	北トレンチ	石製品 砥石	(4.1)	3.1	(4.7)							3面磨削	1997/4 00090
63-66	北トレンチ	弥生土器 甕			(3.3)	回転ナデ	ナデ指捺押圧		金雲母・角閃石微砂粒を含む	※ 黄褐色～黄褐色 ※ 暗灰色	良好	口縁端部に刻目	1997/4 00091
66-72	北トレンチ	弥生土器 甕			(4.5)	回転ナデ 刷毛目	ナデ		1～2mmの砂粒を多く含む	黄灰色	良好	外面に黒斑	1997/4 00092
63-66	北トレンチ	弥生土器 甕			(4.3)	回転ナデ 刷毛目	回転ナデ 刷毛目		1～3mmの砂粒を多く含む	※ 淡褐色 ※ 暗褐色	良好		1997/4 00093
63-66	北トレンチ	弥生土器 甕			(4.8)	回転ナデ	ナデ指捺押圧		1～3mmの砂粒を多く含む	細乳白褐色	良好		1997/4 00094
66-75	北トレンチ	弥生土器 鉢			(4.5)	回転ナデ	ナデ指捺押圧		1mm大の砂粒を若干含む	※ 灰黒色 ※ 淡茶褐色	やや良好		1997/4 00095
63-76	北トレンチ	弥生土器 甕	4.0	(4.8)	ナデ指捺押圧	ナデ			1～3mmの砂粒多量の角閃石を含む	黄褐色	良好		1997/4 00096
77	南トレンチ	弥生土器 甕			(4.0)	ナデ	剥落不明	ナデ	角閃石・金雲母1～3mmの砂粒	※ 黄灰色 ※ 黄褐色	良好		1997/4 00099
66-78	弥生土器	ガラス製品 インクビン	2.2	4.0	5.8							裏面に「THE KITAURA MUSEUM TOKYO」	1997/4 00001
66-79	弥生土器	土 師 器 黄褐色カマド			(16.2)	刷毛目 指捺押圧	刷毛目 指捺押圧		角閃石・金雲母赤色砂子	※ 暗赤褐色 ※ 茶褐色	良好	底・把手を有する	1997/4 00002
63-66	弥生土器	土師器 甕	13.2	(5.7)	回転ナデ	回転ナデ 横ナデ	へう切り 横ナデ		赤色砂子 金雲母	淡褐色	良好		1997/4 00003
63-66	弥生土器	土師器 甕	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	へう切り 横ナデ	回転ナデ		赤色砂子 金雲母	淡褐色	良好		1997/4 00004
66-82	弥生土器	須恵器 坏身	10.3	13.0	(2.9)	回転ナデ	回転ナデ		3mm程度以上の砂粒を含む	灰褐色	良好		1997/4 00005
63-83	弥生土器	土製品 土器	5.8	1.95	2.15	ナデ			角閃石 微砂粒	淡褐色	良好		1997/4 00006
66-84	弥生土器	土製品 把手				指捺押圧 ナデ			多量の赤色砂子	※ 黄褐色～暗褐色 ※ 淡褐色	良好	ソケット型	1997/4 00007
63-66	弥生土器	片岩 石彫丁	(4.2)	0.4	(4.4)							両刃 刃こぼれあり	1997/4 00008
66-86	弥生土器	甕	5.5	(4.9)	刷毛目	ナデ	ナデ指捺押圧		金雲母・角閃石1～3mmの砂粒を含む	※ 黄褐色～暗褐色 ※ 暗褐色	良好		1997/4 00009
87	弥生土器	甕	5.6	(7.1)	磨滅不明	ナデ	ナデ		1～3mmの砂粒を多量に含む	※ 暗褐色 ※ 黄褐色	良好		1997/4 00010
66-88	弥生土器	土製品 把手	5.8	4.3	(5.9)	指捺押圧 ナデ			長石・石英・角閃石砂粒を含む	黄灰色	良好		1997/4 00011
63-66	弥生土器	須恵器 坏	11.4	7.9	3.9	回転ナデ	回転ナデ	へう切り	微砂粒を含む	※ 灰褐色 ※ 灰褐色	良好		1997/4 00012
66-90	弥生土器	甕			(5.1)	回転ナデ	ナデ		角閃石・金雲母砂粒を多く含む	※ 黄褐色 ※ 黄灰色	良好		1997/4 00013
66-91	弥生土器	甕			(3.2)	回転ナデ	回転ナデ		1～4mm大の長石若干の砂粒	乳灰色	良好		1997/4 00014
66-92	弥生土器	甕			(3.9)	回転ナデ	ナデ		角閃石・石英赤色砂子	黄灰色	良好		1997/4 00015
66-93	弥生土器	甕	6.5	(4.7)	ナデ	ナデ	ナデ		長石1～5mmの砂粒を多量に含む	※ 赤褐色 ※ 黄灰色	良好		1997/4 00016
66-94	弥生土器	甕	5.9	(4.7)	刷毛目カ (磨滅)	ナデ	ナデ		1～3mmの砂粒を多量に含む	※ 暗褐色 ※ 暗褐色	良好		1997/4 00017
66-95	弥生土器	甕	6.6	(4.3)	刷毛目	ナデ	ナデ		1～3mmの砂粒多量の角閃石を含む	黄褐色	良好	底面に穿孔	1997/4 00018
66-96	弥生土器	甕	6.0	(4.9)	ナデ	ナデ	ナデ		1～3mmの砂粒を多量に含む	※ 褐色 ※ 黄褐色	良好		1997/4 00019
66-97	弥生土器	甕	6.4	(9.3)	刷毛目	ナデ	ナデ		1～3mmの砂粒角閃石を多く含む	※ 暗褐色 ※ 暗褐色	良好		1997/4 00020
66-98	弥生土器	甕	8.2	(2.3)	ナデ	ナデ	ナデ		1～3mmの砂粒を多量に含む	淡褐色	良好	底面に木ノ葉文 (正刷)	1997/4 00021
66-99	弥生土器	鉢	3.1	(5.3)	ナデ指捺押圧	板状工具でナデ	ナデ		細砂粒・多量の角閃石	※ 黄褐色 ※ 黄褐色	良好	底部に黒斑	1997/4 00022

4. まとめ

調査の成果を記す前に、以前に調査した西屋敷遺跡（第0～2次）と北屋敷遺跡（第1～4次）の結果をここで一度まとめておきたい。この両遺跡は市ノ上台地に存在し、共に縄文時代～近世までの複合遺跡で、同様な遺跡の様相を呈する。

縄文時代の遺構は検出されていないが、遺物は早・中・後期の土器および石器が出土している。

弥生時代になると、北屋敷遺跡において、前期後半の円形住居1軒、中期前半の竪穴住居2軒、中期中葉の土坑4基、甕棺墓は前期末が1基、中期中葉が4基検出されている。西屋敷遺跡では前期末～中期初頭の土坑や中期初頭～前半の甕棺墓が30基、甕棺埋葬形態が終わると土壇墓・石棺墓が出現している。終末期の石棺墓から半截された小形仿製鏡が出土している。

古墳時代は、北屋敷遺跡で初頭の竪穴住居を2軒、西屋敷遺跡で後期後半の竪穴住居を2軒検出。

奈良時代においては、西屋敷遺跡で土坑群が多く検出されている。また、平安時代に入ると、土壇墓が出現し、さらに、区画の溝も検出されている。

中世の遺構は、西屋敷遺跡で屋敷割り・防御施設を兼ねた溝があり、近世初頭まで機能したと考えられる。また、室町時代には墓地として利用されており、土壇墓が14基検出されている。

江戸時代の遺構としては、北屋敷遺跡で軒瓦や近世陶磁器を包蔵した土坑が検出され、久留米藩主有馬家の別邸との関連性を推測している。西屋敷遺跡では18世紀後半の井戸を検出している。



Fig.67 調査地周辺主要遺構配置模式図 (1/1,500)

以上のような過去の調査成果を背景に、今回の調査をまとめてみたい。

第3次調査において、検出した遺構・出土遺物の整理作業が進捗するに従い、時期を決定し得る遺構がこのほか少ないことが明らかになった。というのも、現代の掘り込みによって崩壊・破壊されているものが多かったことによる。このような状況の下、調査の成果として特筆できる時代を、弥生時代と江戸時代の2時代に絞ることができよう。

まず、弥生時代の遺物が多量に出土した遺構は、北トレンチの東側に広がる谷状遺構である。その埋土は、市ノ上台地堆積する遺物包舎層とは異なった土質であり、特に粘質が強いものであった。この谷状を呈する掘り込みが、人為的なものか、雨水等の流路によって崩れたものか、今一つ判断資料を欠く。地形に目を転ずると、明治33年に大日本帝国陸地測量部作成の地図には、本調査地の北西に台地に入り込んだ低地の部分を認めることができる。現況はすでに盛土され、旧状を窺ふことはできないが、谷筋の南辺を低地に向かう排水路にその面影は残されている。谷状遺構の延長が低地へと向かうことは相違ないであろう。谷状遺構から出土した遺物は、弥生時代前期後半～後期までに序まり、廃棄されたものと考えられる。西屋敷・北屋敷遺跡における弥生時代の様相は、台地縁辺に先端に谷が存在し、その周辺に集落が取り巻く、集落の外に当たる台地の縁辺に墓地区が形成されたと推測できる。

次に、江戸時代の遺構では、溝・土坑・井戸を検出した。周辺の調査においても同時代の遺構・遺物が出土している。西屋敷や北屋敷といった小字名は、明治15年の字小名調に記載されている。大字である「市ノ上」の記載は、「高良山文書」「高良社神職名知行所数々之事」の中、文禄2年(1593)三月十八日に座主・大宮司・大祝から桂民部大夫に宛てた文書に「拾八町 市上」とある。元禄14年(1701)「在方諸崙書」「領内郡村役高・古高・元禄郷領高」に、「五百五拾七石 八百九十二石九斗四升 市上村 二十一町」。さらに、「久留米藩 農政・農民史料集」に記載された記述では、文化4年(1807)「市ノ上村 五六七反 五六二石」とあり、内容は「本田 16町1反4畝12歩、開田 2町4反9畝1歩、畑田 4町5反15歩、畑 27町3反7畝29歩、居屋敷8反1畝2歩」と詳細な面積が記されている。また、7代藩主の生母盛徳院は、丘陵の東辺にあった藩土の下屋敷を召し上げて遊園を造ったと『御当家事蹟』にあり、慶應2年(1866)には市ノ上にあった藩主の別邸の規模を拡張したとの記録も見ることができる。これらの文書の他、「元禄国絵図」「天保郷帳」の中にも記載されている。

近世における市ノ上村は、城下に最も近い村でもあり、畑を主とした生業を営む農村として繁栄し、やがて、土の住居や藩主の別邸が築かれ、他の農村集落と異なった様相を示す。

また、調査地の西側には、市ノ上台地の縁辺を走る道路があり所々に切り通しの痕跡が見られる。江戸期には村の周囲を巡る生活道として使用されたと考えられる。

西屋敷遺跡は複合遺跡として、縄文時代～近世に至る遺構が検出されている。しかし、各時代毎にまとめるには資料の絶対数に欠けるため、今後の調査成果を蓄積した上で西屋敷遺跡を考えてみたい。

加えて、西屋敷遺跡のみならず、北屋敷遺跡を含めた市ノ上地区を一遺跡として考慮する必要性を改めて感じた。



Fig.08 調査地から市ノ上天宮宮を望む

Ⅳ. 山川南本村遺跡（5次）

1. はじめに

本遺跡は久留米市街から東側、山川町字本村・長園一帯に所在する。今回の調査は、平成9年9月18日、地権者の[]氏より専用住宅建設に伴い、山川町668-1の埋蔵文化財包蔵地の確認調査依頼書が提出されたことに始まる。当該地は平成6年に調査を開始して以来、4次にわたる発掘調査が行われている山川南本村遺跡の調査地から南へ約700mの位置に所在する。山川南本村遺跡は、弥生前期末～中期初頭の集落を中心とし、古墳・奈良・平安・鎌倉・室町時代にわたって遺跡が営まれている複合遺跡であり、以前よりかなりの範囲に遺跡が広がっていると想定されており、依頼地もその範囲に含まれるものと思われた。そこで今回の依頼地も過去の調査地に隣接していることもあり、8月11日に確認調査を行った。その結果、専用住宅建設予定の地表下約25cmに遺構が確認され、発掘調査が必要であると判断された。調査は遺跡の範囲確認と各時代の遺構の広がりを確認することに重点を置き、専用住宅建設により破壊される部分のみを行った。調査期間は平成9年10月7日に開始し、同年11月10日終了した。



Fig.66 表土剥ぎ状況（南から）

2. 位置と環境

山川南本村遺跡は、筑後平野の南に連なる耳納山地の北麓に形成された複合扇状地上の標高約31mに位置する。遺跡の立地する扇状地の東西には谷が入り、舌状台地状を呈している。耳納山地の北麓にはこ

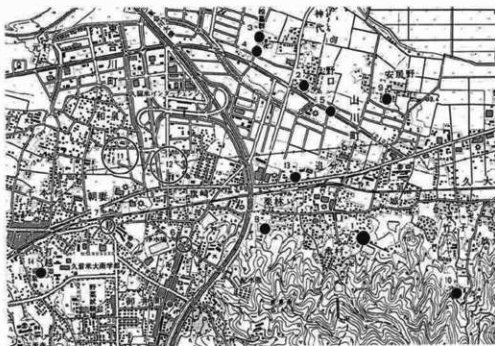


Fig.70 周辺の遺跡分布図（1/25,000）

遺 跡 名

1. 山川南本村遺跡
2. 野口遺跡
3. 安国寺遺跡
4. 松ヶ本遺跡
5. 大畠遺跡
6. 二本木遺跡
7. 横道遺跡群
8. 山川南田遺跡
9. 安匠野遺跡
10. 七曲山古墳群
11. ヘボノ木遺跡
12. 神道遺跡
13. 新婦遺跡
14. 福聚寺古墳群

のような地形が連続して形成されており、各尾根上には様々な時代の遺跡が営まれている。特に古墳時代後～終末期に形成された装飾古墳を多数含む群集墳は、総数千墓以上に上ると言われ、県下でも屈指の群集墳密集地帯となっている。又、この耳納山地の北麓沿いには水鏡断層をはじめとした活断層が東西方向に走っており、耳納山地の北麓には断層の活動で形成された切り立った山々が多く見られる。本遺跡の西約0.7kmの山川前田遺跡では、「日本書紀」に天武七年十二月条に記載がある筑紫大地震の震源と思われる断層が発見された。この遺跡は文献と一致する希少な例として国指定天然記念物に指定されている。

一方、本遺跡の北側に目を移すと、約1.8kmには肥沃な穀倉地帯である筑後平野を筑後川が西流している。耳納山地と筑後川の間には筑後川の度重なる氾濫によって自然堤防が幾つも形成され、そこを舞台として多くの遺跡が営まれている。概観してみると、北西約1.0kmには縄文時代前期の集落跡を主体とする野口遺跡が所在している。特に野口遺跡出土の縄文前期の土器は、竊B式から曾畑式への過渡的な土器として重要視されている。更に北西約1.5kmには安国寺遺跡が存在する。安国寺遺跡は旧石器時代・縄文時代早～晩期の遺物、弥生時代中～後期の甕棺墓・祭司遺構、中世の遺構・遺物が認められ、中でも弥生時代の甕棺墓・祭司遺構は、弥生時代の精神文化の復元に極めて重要と評価され、指定史跡となっている。他にも北西約0.8kmには、銅鐸の出土が伝えられる大島遺跡が所在し、発掘調査では弥生時代前期・終末期の遺構・遺物が出土している。以上のように自然堤防上には多くの遺跡が認められ、古くから人々の生活の舞台であったことを想定させる。

以上、本遺跡を取り巻く環境を概観したが、耳納北麓における発掘調査例は以外と少ない。しかし、大小の開発が徐々に増加してきており、今後の発掘調査の増加と共に、当該地周辺の歴史の評価を行って行かなければならないだろう。

参考文献

久留米市史編さん委員会編 『久留米市史』第12巻 資料編（考古）1994



Fig.71 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2500)

3. 調査の記録

（1）調査の概要

今回の調査は、専用住宅建設で遺構が破壊される部分の約220m²を対象として行われた。平成9年10月7日に重機により表土を除去し、地表から遺構検出面までの深さは北東側で約1.1m、南西側では0.1mと比高差1.0m程度の傾斜がある。傾斜が急であったため、表土を除去した時点では旧地形を保っていると思われた。しかし、遺構を掘り下げてみると概して浅く、南西側に行くほど削平されていた。10月13日に平板図を作成し、遺構を北東側から掘り下げて行き、順次必要に応じて写真撮影・実測を行った。その後遺物を取り上げて行き、10月29日には遺構実測を開始、併せてエレベーションを実施した。11月5日には山川郷土史研究会の訪問があり、見学・説明を通して本遺跡の重要性を認識してもらうことに努めた。同日気球写真撮影。11月11日に重機により埋め戻しを行い調査を終了した。



Fig.72 調査風景

（2）遺構の概要



Fig.73 遺構配置図 (1/150)

今回の調査地は山川南本村遺跡の南部分にあたると思われ、本調査地より南部は急傾斜の山に入る。北約500mは第3次調査地点であり、更に北側へなだらかな斜面地に遺跡は営まれている。過去の調査では、弥生時代前期末～中期初頭を中心に、古墳～中世の遺構がかなりの密度で重複していたが、今回の調査でも弥生時代の竪穴住居・廃棄土壌・貯蔵用竪穴・ピット等を中心として、奈良時代の竪穴住居、近世の遺構が切り合いをもって検出された。しかし調査区南西側では削平が著しく、竪穴住居は数センチ壁が残存した状況であった。以下、各遺構の概要を報告する。

a) 弥生時代の遺構

S I 2 (Fig.76・77)



Fig.74 調査区全景（南から）



Fig.75 調査区全景（上空から）

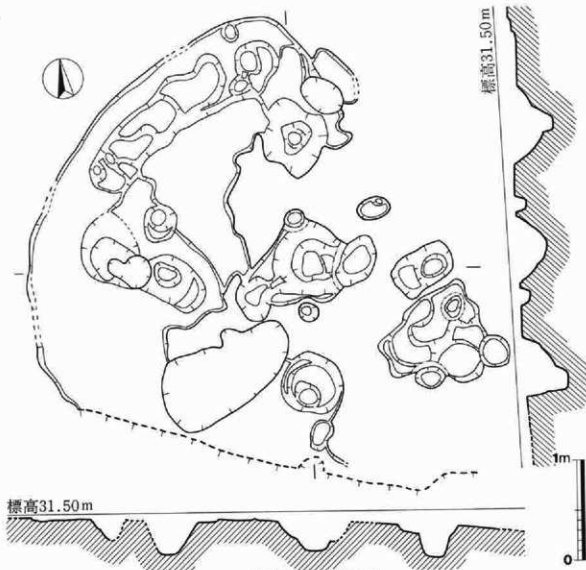


Fig.76 S I 2実測図 (1/40)

S12は調査区北西側で検出した前期末～中期初頭の円形を呈する竪穴住居である。東側半分を削平され、南側を近世のSK170に切られている。辛うじて西側に全体の1/3程度の外周が残存しているが、残りがよい所で壁面の立ち上がりは7cm程度である。他にもSK190等の後世の遺構が切り合っている。よって、床の硬化面は検出できず、全容は明らかではない。検出した時点で、ほぼ全体に焼土が散布しており、火災にあったものと思われるが以上のような状況であるので判然としなない。住居の規模は、残存している状況より復元すると直径約5.6mとなる。又、中央に直径約0.7cmの土坑を検出したが焼土は発見されず炉跡とは考えられない。この土坑の対になる両端に20cm程度のビットを検出した。支柱穴は4本である。広義の解釈をすると松菊型タイプの竪穴住居になると思われる。埋土は暗茶褐色で、埋土中及び床付近から弥生土器小片・黒曜石の剥片が多く出土した。他にも土師器片が出土した。



Fig.77 S12全貌（上空から）

SK3

調査区の東側壁沿いで検出した。南西部のみの検出であるが、コーナー部を最近まで使用していた井戸によって破壊されており、規模など不明な点が多い。立ち上がりは低く最大で10cm程度で、底面は概してフラットである。遺構内からは弥生土器のみしか出土せず、壺の口縁部・胴部片・小片が出土した。埋土は茶褐色土である。竪穴状の貯蔵穴であると思われる。

SK150 (Fig.78)



Fig.78 SK150全貌

調査区の中央南寄りで検出した。次ぎに報告するSK160を切って検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7mである。深さは約0.3mでほぼ平坦であった。埋土は一括と思われ、炭化物・小礫を多量に含む黒褐色の砂質土であった。出土遺物は全て弥生時代の遺物で、壺の口縁部・胴部片・底部片、壺の胴部片・底部片、器台片、小片で、他は礫石、黒曜石の石核・剥片、サヌカイトの剥片である。形態・出土遺物から廃棄土坑と思われる。

SK160 (Fig.79.80)

調査区の中央南寄りのSK150の西側で検出した。平面形は長い楕円形を呈しているが、東西で2つの遺構に分かれる可能性もある。しかし全体的に削平が著しく判然としなない。別遺構になるとすると、遺物の残りが良好であった西側部分は直径約1.8mの円形の土壇になる。残存状況はビット状になった部分で深さ約0.4m、全体的には約5cm程度である。図示したのは残存状況が良好であった北側の部分で、弥生土器の壺の口縁・底部・胴部片等が出土した。

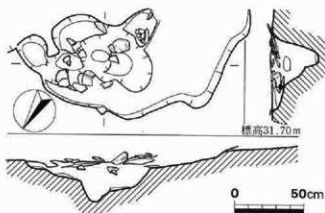


Fig.79 SK160実測図（1/30）

埋土は暗茶褐色の砂質土で、残りが悪いので不明な点が多いが、土層は観察されず、一括の廃棄によるものと思われる。全体からの出土遺物は弥生土器が大半を占め、甕の口縁部・胴部・底部、壺の頸部・底部、器台片、黒曜石・サヌカイトの剥片、他に少量の土師器の坏・甕・小皿等の細片が出土した。後世の流れ込みによるものと思われる。SK150と同様に廃棄土層と思われるが、極めて近い時期に同じ場所に廃棄土層が作られていることから、この場所が廃棄の場として認識されていたことが考えられる。又、東側の部分からは弥生土器が少量出土した。

SK191 (Fig.81・82)

調査区中央のS11の西コーナーに切られる形で検出した。平面形態は隅丸方形で、長軸約0.65m、短軸約0.55m、深さ約0.3mである。埋土は一括と思われる。茶褐色の砂質土であった。出土遺物はさほど多くないが、図示した今山産の玄武岩製と思われる磨製石斧を始め、弥生土器の甕・壺等の口縁部・胴部・底部の細片、黒曜石の石核・剥片、サヌカイトの剥片・削器等が出土した。廃棄の為の土層と思われる。



Fig.81 SK191遺物出土状態

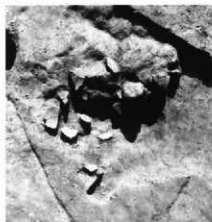


Fig.80 SK180遺物出土状態

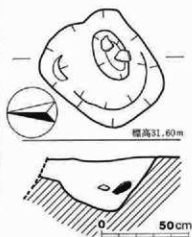


Fig.82 SK191実測図 (1/30)

b) 歴史時代の遺構

S11 (Fig.83~85)

調査区中央西寄りで見出した方形プランの竪穴住居である。主軸はN-52°-Eで南部分は近世の芋茎により破壊されている。一片は約3.0mであり、北東側の壁には壁から突出した竈を作りつけている。削平により残りは悪く、北側では2~3cm、南側でも約0.2mである。床面はほぼ平坦である。検出した床面は、小礫や砂利が多く見られ、若干硬い。床面構築の際のものか、生活していた際に踏み固められたものかは判断できなかった。前述のように壁は残りが悪く直には立ち上がらない。竈・竈前面付近には焼土が見られ、竈を廃棄した際に竈内部の焼土を掻き出したものと考えられる。焼土内からは土師器の甕または甔の細片



Fig.83 S11全景 (南西から)

が出土した。床面には数個のピットを検出したが竪穴住居に伴うものかは不明である。周辺の状況から弥生時代の遺構の可能性も考えられる。埋土は一括

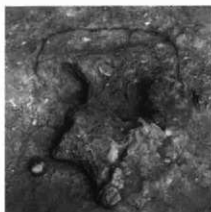


Fig.84 S11 竪穴検出状態

で、黒褐色砂質土の中に、地山の黄灰色砂質土がブロックで多く混入していた。廃棄の際に埋め戻したものであろう。竈は突出部長が0.25m・幅0.65mで、深さは8cm程度しか残っていない。掘り方には壁に沿って幅6~17cmの黄灰色粘土を施している。袖部は確認されなかった。この粘土の内側に焼土が見られるが、断面を観察してみると、焼土中に黒色土や黄灰色土が無秩序に混ざっているため、住居を廃棄した際に、竈も破壊したと思われる。又、焼土中からは土師器の甗片が出土したが、これは住居の北コーナー付近から出土した甗の胴部と同一個体である。住居内からの出土遺物は土師器の坏片・皿片・甗片・甗・移動式甗片、須恵器の坏片・転用甗片、砥石、弥生土器片、偏平片刃石斧・削器等の石器である。

S K140 (Fig.86・87)

調査区の北西寄り、S12の北東部で検出した。平面プランはほぼ円形を呈し、直径約1.2mである。削平が著しく、更に遺構検出の際に重機で削りすぎた事もあり深さ約5~18cmである。底面は平坦であるが、北側へ若干傾斜している。埋土は一括で、黒褐色の砂質土、地山の黄白色ブロックが混入していた。

弥生時代の遺構を切っており、出土遺物には弥生土器が混入していた。遺物は土鍋、土師器の甗片、小皿片、須恵器

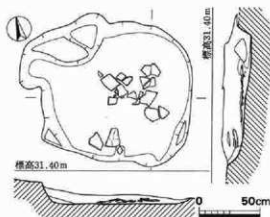


Fig.86 SK140実測図 (1/30)



Fig.87 SK140 遺物出土状況

の坏蓋、弥生土器の甗の口縁部片や細片が出土した。特に土鍋は廃棄された際の原型を止めていると思われる口縁部を揃えて出土した。完形品に近く、底部を欠損するのみである。

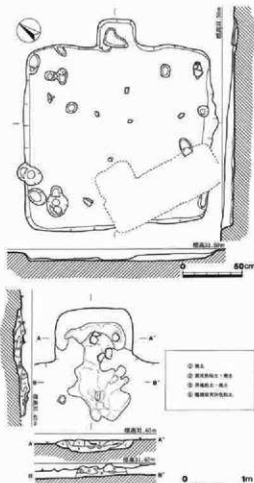


Fig.85 S11・竈実測図 (1/40・1/20)

SK100 (Fig.88)

調査区東側の南寄りで検出した。弥生時代の土層を切っている東西方向に長い長方形の土層である。長軸長約2.5m、短軸長約1.1mである。底面はほぼ平坦で、深さは約0.25mである。埋土は黒色土の砂質土で土層は観察されず、一括の埋土である。検出した時点では、上面に旧家屋の基礎によって攪乱されていたがそれほど深くなく、攪乱を取り除くと遺物が多数出土した。遺物は弥生時代から江戸時代までに及び、江戸時代の遺物が中心を占める。弥生時代の遺物は甕・壺の口縁部・胴部・底部の細片で、土師器の坏・小皿・輪状つまみの蓋・甕・土鍋等の細片、須恵器の坏・鉢・長頸壺等の細片が出土した。江戸時代の遺物は、陶器の皿、摺鉢、火入れ等で、他に丸瓦の細片や瓦葺碗の細片が出土した。遺構の性格としては江戸時代の廃棄土層と考えられる。



Fig.89 SK110全景（北東から）

SK110 (Fig.89・90)

調査区の中央付近で検出した。平面プランはほぼ円形で、直径約0.75mである。掘り方は底面に向かって狭くなり、底は平坦である。深さは約0.5mである。上面から徐々に掘り下げて行くと、深さ約0.25mの所で2個の板石が並んで検出された。板石は東西に並んでおり、東側の石が若干沈んでいる。一定の深さに水平に据えられていることから、人為的に行われたのであろうがその用途は不明である。甕などを据えるためのものであろうか。出土遺物は石より上面で弥生土器の細片、土師器の坏の細片、江戸時代の磁器の瓶、石より下面で弥生土器・土師器の細片、瓦の細片が出土した。



Fig.88 SK100全景

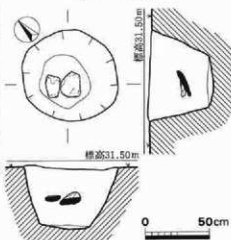


Fig.90 SK110実測図（1/30）

SK170・180 (Fig.91)

調査区西側で検出した。SK170は東西方向に長い長方形の土層で、長軸長約4.5m、短軸長約1.4mである。底面は平坦で深さ約5～20cmと浅い。SK180とは西側の部分でつながっており、その接続している部分に、35cm程度の石がSK180側に傾いた状態で検出された。切り合いは確認できなかった。埋土は黒色砂質土で、S12のものと思われる焼土が混入していた。出土遺物は弥生土器の細片、土師器の細片と土鍋の口縁部、火舎の細片、陶器の香炉等が出土した。SK180は調査区西壁沿いに検出したが規模等の全容は不明である。深さは最深部で約0.4mであるが2段掘りになっており、1段目はSK170と同じ高さである。埋土はSK170と同じく黒色砂質土である。出土遺物は土師器の細片、陶器の甕の底部が出土した。



Fig.91 SK170・180全景（上空より）

S K 190 (Fig.92)

調査区西側のS 1 2と切り合った状態で検出された。検出時点で埋土の違いからS 1 2とは別遺構であることは容易に確認できた。平面プランは楕円に近い長方形で、長軸長1.4m、短軸長約1.1m、深さは約0.3mで底面は平坦である。掘り方の壁は直に立ち上がる。埋土は黒色砂質土で、地山の灰白色のきめ細かい砂質土のブロックが混入している。土層は確認できず一括の埋土である。出土遺物は弥生土器の甕の口縁部、胴部、底部等の細片、黒曜石の石核・剥片、土師器では坏や甕の細片等、須恵器の細片であるが、いずれも細片で、出土量も少量で混入品という感触を得た。



Fig.92 S K 190全景(北から)

(3) 遺物の概要 (Fig.93~97)

今回の調査で出土した遺物は、パンコンテナーに6箱余りである。中心をなすものは弥生土器・石器類であるが、その他に歴史時代の土師器、近世陶磁器類と豊富である。以下遺構ごとに報告するが、別の時代の遺構が重複したものが多く、各時代の遺物が混入している。

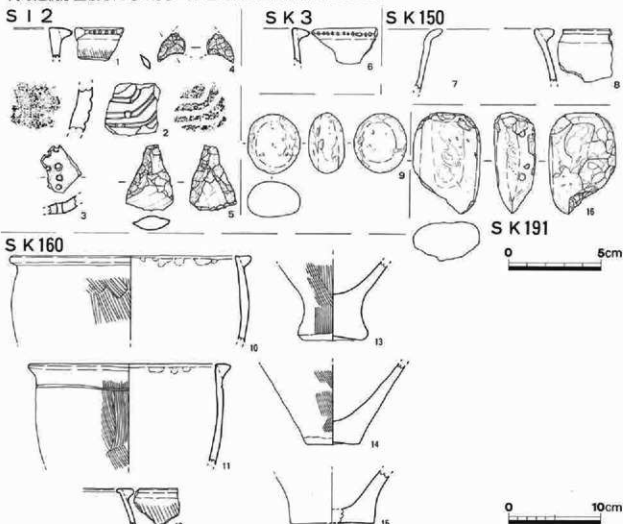


Fig.93 S 1 2・S K 3・S K 150・S K 160・S K 191出土遺物実測図 (1/2・1/4)

S I 1

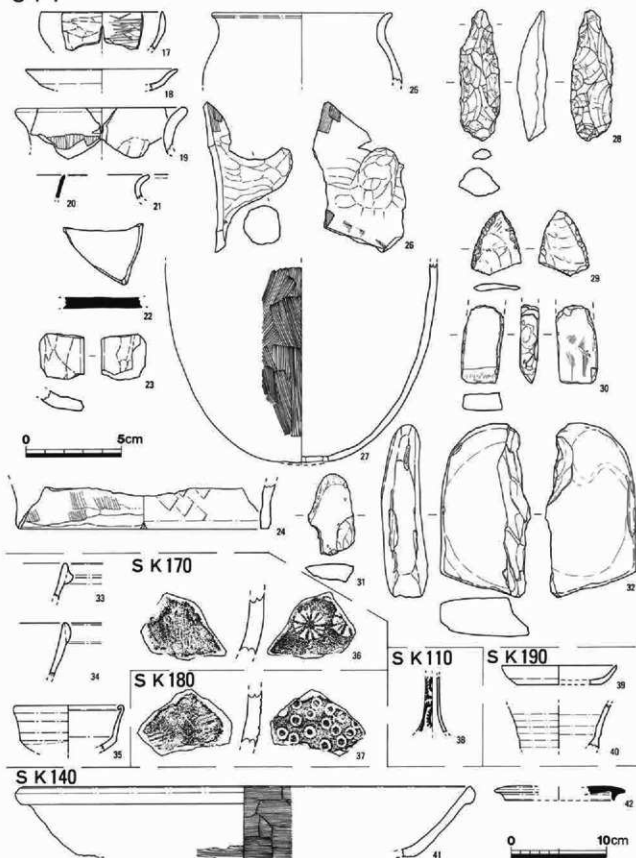


Fig.94 S I 1, S K 110, 140, 170, 180, 190出土遺物実測図 (1/2・1/4)

S I 2（1～5） 遺構の削平が激しく図示できた出土遺物は少ない。1は弥生土器の甕の口縁部、2は縄文土器片、3は土師器の甕の底部である。混入品であろう。

S K 3（6） 出土遺物は極めて少なく、図示できたのは6の1点のみで、弥生土器の甕の口縁部である。

S K 150（7～9） 出土遺物が多いが、図示できるものは少ない。7・8はいずれも弥生土器で、甕の口縁部である。9は敲石で、右側面を主に使用している。

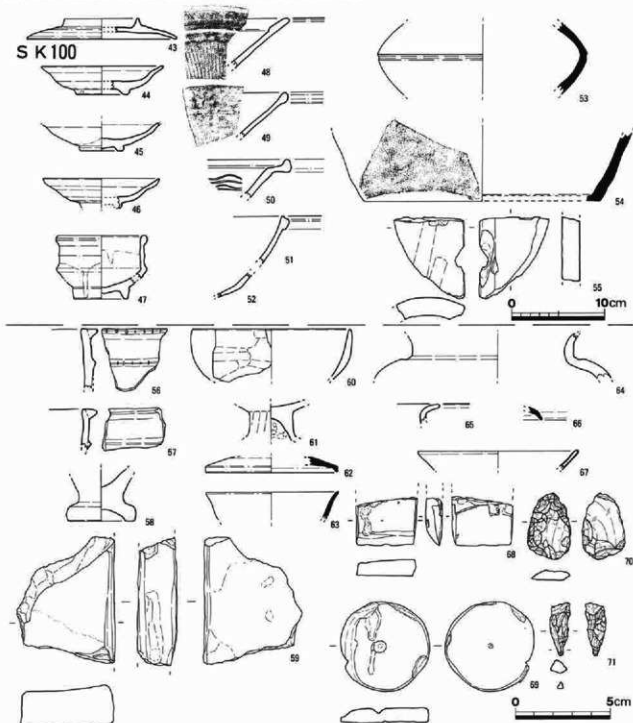


Fig.85 S K 100. その他出土遺物実測図（1/2・1/4）

S K 160（10～15） 10～12は弥生土器の甕の口縁部でいずれも三角口縁の下部より縦方向のハケメを施す。11は口縁下部に1条の沈線を巡らす。13～15は底部である。11と13は同一個体と思われる。

S I 1（17～32） 出土遺物は土師器が中心で、弥生土器・石器も混入している。17は土師器の椀。手持ちへう削りによる調整で、丹塗りの痕跡が残る。18は土師器の皿。19は土師器の甕の口縁部である。20は須恵器の杯の口縁部。21は土師器の甕の口縁部である。22は転用硯片で硯面には光沢があり、かなりの使用が考えられる。23・24は移動式のカマド片であろう。25は土師器の甕又は甗の口縁部である。26は甗の把手である。ナデによる調整で、ソケット状かは確認できない。27は甗の底部。かすかに外面からの穿孔が確認できる。28は石椀。29は削器である。30は扁平片刃石片で粘板岩製。31・32は砥石で、31は熱を受け赤色化している。小片で砥面がわずかに残る。32は片岩製で片方の側面を欠損している。両面と側面を使用している。

S K 170（33～36） 33・34は土鍋の口縁部である。いずれも玉縁より下部にはスが多量に付着している。35は香炉で17世紀末～18世紀前半の唐津産と思われる。36は火舎の胴部で菊花紋のスタンプが見られる。

S K 180（37） 37は火鉢の胴部と思われるが、器壁が厚く瓦質にちかい。内面にスが付着しており、他の器種も考えられる。

S K 110（38） 38は瓶の頸部である。外面には銷唐草紋を施す。18世紀後半の所産で、本市両替町遺跡のS K 26・56より類似品が出土している。

S K 190（39・40） 39は土師器の杯で底部はへう削りの痕跡が残る。胴部は回転ナデ調整である。40は土師器の杯で、内面にスが付着している。

S K 140（41・42） 41は土師質の土鍋である。口縁部は肥前・筑後地域に見られる玉縁状を呈する。底部を欠損しているが、器高は低く径は大きい。あまり類例を見ない。42は須恵器の杯蓋である。天井部は回転へう削りで平坦で、器形としては奇形である。

S K 100（43～55） 43は土師器の輪状つまみの杯蓋である。44～46は陶器の皿である。全体に灰釉がかかるが、見込みは輪状に掻き取る。底部は削り出し、高台から底部は露胎である。47は香炉で口縁部付近には釉がかかる。底部は削り出す。44～46と共に17世紀後半～18世紀前半の唐津産と思われる。48・49は陶器の摺鉢である。口縁形態や釉が口縁部のみにかかる特徴から18世紀の所産と思われる。50は陶器の大鉢の口縁部で、二彩のような釉がかかる。51・52は土師質の土鍋である。恐らく同一個体と思われる。口縁より下部にはスが多量に付着している。53は須恵器の長頸垂の胴部である。屈曲部には1条の沈線を巡らす。外面には自然釉がかかる。54は須恵質の鉢の底部と思われる。55は丸瓦の細片である。外面はケズリ、内面には布目跡が残る。時期は不明である。

その他の出土遺物（56～71） 56・57は弥生土器の甕の口縁部である。S P 22から出土した。58は弥生土器の甕の底部である。S P 54から出土した。59は砂岩製の砥石で、上・下・側面を欠損している。S P 33から出土した。60はS P 40から出土した土師器の椀である。丹塗りの痕跡が残る。外面は手持ちによるへう削り調整である。61は土師器の高杯の脚柱部である。削りによる調整で丹塗りの痕跡が残る。S I 1上の芋釜より出土した。62・63は須恵器の杯でセットになるとと思われる。8世紀前半の所産である。S P 60から出土した。64もS P 60からの出土遺物で、土師器の甕である。65は弥生土器の甕の口縁部である。S P 83からの出土である。66は須恵器の蓋と思われるが、細片のため器形は判然としない。

67はSK120からの出土遺物で、白磁碗V類である。口縁部の釉は厚い。68はSP143 から出土した偏平片刃石斧である。上部を欠損している。粘板岩製である。69は片岩製の紡錘車未製品で、SP35から出土した。孔の場所が全く異なり、作成途中で放棄したのであろう。70はSP121 から出土したサヌカイト製の石鏝である。削器になるかもしれない。71は石鏟で石材はサヌカイトである。SK195 から出土した。

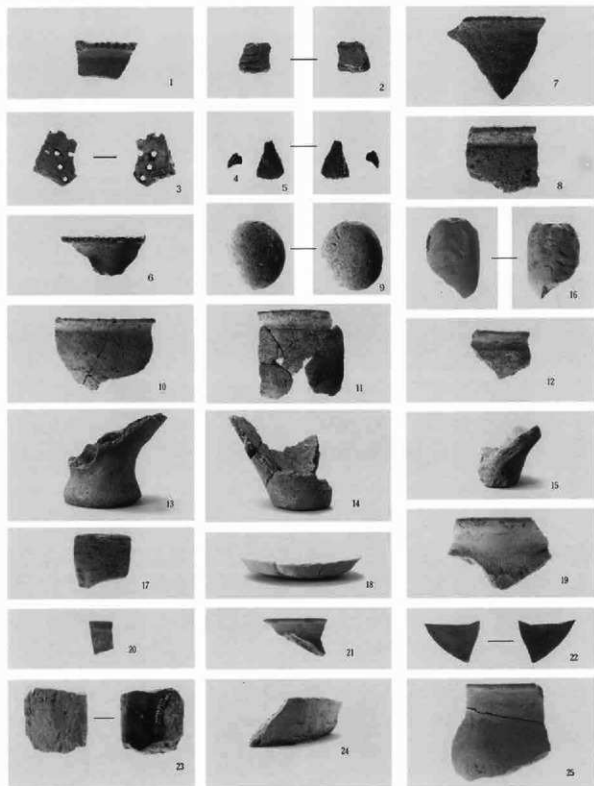


Fig.96 出土遺物①

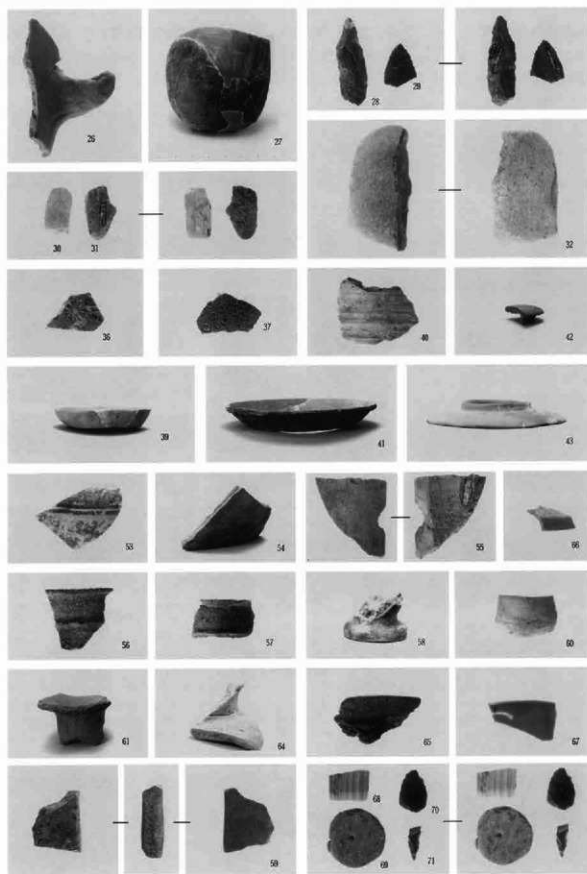


Fig.97 出土遺物②

Tab.4 遺物観察一覧表①

図 No.	出土遺物	器 種	法 量 (cm)			面 積		土 質	色 調	焼 成	備 考	登録番号	
			口径長	底径厚	器高幅	外 面	内 面						底 面
1	Si2	壺			(3.2)	ハケ目	ヨコナデ	多量の細砂粒 石英・金雲母	明赤褐色	良好		199728 00027	
2	Si2	鉢			(2.8)	顔消線文 沈線	ナデ	1~2mmの砂粒	にぶい橙	良好	小泡線土層 式	199728 00025	
3	Si2	瓶			(5.1)	ナデ	ナデ	少量の細砂粒 石英・角閃石・金雲母		良好	外面からの 穿孔	199728 00028	
4	Si2	石 槌	(1.8)	(0.25)	(1.2)			黒曜石			2/3は欠損	199728 00024	
5	Si2	削 器	3.5	0.75	2.5			サヌカイト				199728 00026	
6	Sk3	壺			(3.8)	ハケ目	ナデ	1~2mmの砂粒 石英・角閃石・金雲母	にぶい黄橙	良好	外面に黒炭	199728 00029	
7	Sk150	壺			(6.9)	ナデ	ナデ	多量の砂粒 石英・金雲母	明褐色	良		199728 00060	
8	Sk150	壺			(5.8)	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の砂粒 石英・角閃石・金雲母	橙	良好		199728 00062	
9	Sk150	磁 石	6.5	3.8	5.7			安山岩			石割面の使 用が多い	199728 00061	
10	Sk160	壺	(26.0)		(9.4)	ハケ目	ナデ	2~5mmの小礫 石英・角閃石・金雲母	にぶい黄橙	良好		199728 00069	
11	Sk160	壺	(22.0)		(10.8)	ハケ目	ナデ	2~4mmの小石英	にぶい黄橙	良	No13と同一 器体か	199728 00068	
12	Sk160	壺			(4.1)	ハケ目	ナデ	細砂粒 石英・角閃石	にぶい黄橙	良好	丹塗の痕跡	199728 00064	
13	Sk180	壺		7.8	(8.1)	ハケ目	ナデ	2~5mmの小礫	橙	良好	No11と同一 器体か	199728 00067	
14	Sk180	壺		5.7	(8.5)	ハケ目	ナデ	2~5mmの小礫	赤 橙	良好		199728 00063	
15	Sk160	壺		(9.0)	(5.1)	ハケ目	ナデ	多量の砂粒 石英・角閃石	橙	良好	全体的に磨 減	199728 00066	
16	Sk191	石 斧	11.0	4.0	7.2			玄武岩			多少度・数 回の再加工	199728 00079	
17	Si1	碗	(12.6)		(3.9)	手持ち ヘラズリ	ミガキ	細砂粒	橙	良好	丹塗り	199728 00021	
18	Si1	皿	(16.0)		(2.2)	上縁部ナデ 下縁部ヘラズリ	回転ナデ	細砂粒	橙	良		199728 00017	
19	Si1	壺	(18.0)		(4.9)	回転ナデ下 部ヘラズリ	回転ナデ	細砂粒 石英・角閃石・金雲母	にぶい黄橙	良好	外面丹塗りの 痕跡	199728 00015	
20	Si1	杯 身			(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	精 良	赤 灰	良好		199728 00009	
21	Si1	壺			(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒 石英・角閃石	橙	良好		199728 00016	
22	Si1	転用器	(2.8)	0.5	(4.1)	(ナデ)	ナデ	精 良	赤 灰	良好		199728 00022	
23	Si1	カマド			(4.6)	クズリ	ナデ	小礫を思わせる精良	橙	良		199728 00014	
24	Si1	カマド		(26.0)	(4.7)	クズリ ナデ	クズリ	細砂粒 石英・雲母	淡黄橙	良	内面スス付 着	199728 00020	
25	Si1	燗又は瓶	(19.0)		(7.5)	(ナデ)	(ナデ)	細砂粒 石英・角閃石	橙	良	全体的に磨 減	199728 00012	
26	Si1	瓶			(15.8)	ナデ 底部のヘラズリ	クズリ	細砂粒 石英・雲母・赤色粘土	にぶい黄橙	良好		199728 00005	
27	Si1	瓶			(20.8)	ハケ目	クズリ	外面からの 穿孔	1~7mmの小礫	にぶい黄橙	良好	内面に若干の 丹塗り痕跡	199728 00003
28	Si1	石 槌	6.9	1.5	2.2			サヌカイト				199728 00023	
29	Si1	削 器	3.4	0.3	2.6			サヌカイト				199728 00011	
30	Si1	扁平片状石斧	(4.0)	0.9	2.1			粘板岩			上部欠損	199728 00019	

Tab.5 遺物観察一覧表②

図 No.	出土遺物	器 種	法 規 (cm)			面 積			胎 土	色 調	焼成	備 考	登録番号
			口径長	底径厚	取柄幅	外 面	内 面	底 面					
31	Si1	磁 石	(4.2)	(0.8)	(2.5)							熱による 赤色化	199728 00013
32	Si1	磁 石	18.3	4.0	(9.4)				片 岩			断面の片方が欠 損・底面は3番	199728 00002
33	Sk170	土 鍋			(3.8)	ナデ	ヨコハケ		細砂粒	にぶい橙	良好	玉縁より下 部スス付着	199728 00071
34	Sk170	土 鍋			(5.7)	ナデ	ケズリ		精 良	にぶい橙	良好	玉縁より下 部スス付着	199728 00072
35	Sk170	香 炉	11.6		(4.8)	体部下半 ケズリ			陶 器	濃オリーブ	良好	唐津18世紀 前半	199728 00074
36	Sk170	火 舌			(3.4)	ナデ	ケズリ		細砂粒 石灰・金母	にぶい橙	良好	菊文の スタンプ	199728 00073
37	Sk180	火 鉢			(3.2)		ナデ		精 良	灰 褐	良好	外面竹簀文 内面スス付着	199728 00075
38	Sk110	瓶	(1.6)		(5.8)	鍔部華紋			磁 器			肥前 18世紀後半	199728 00053
39	Sk190	杯	(12.0)	(4.0)	2.0	回転ナデ	回転ナデ	ヘラケズリ	精 良 赤色粘土	橙	良好	内面若干 スス付着	199728 00077
40	Sk190	碗			(4.3)	回転ナデ	回転ナデ		精 良	にぶい橙	良好	内面若干 スス付着	199728 00078
41	Sk140	土 鍋	47.1	(35.8)	(7.5)	ナデ	ハケ目 (絶)	ハケ目 (木)	細砂粒 金母多い	灰 褐	良好	外面多量の スス	199728 00057
42	Sk140	杯 蓋	(13.4)		1.5	回転ヘラ ケズリ	回転ナデ		精 良	灰	良好		199728 00058
43	Sk100	皿	(16.0)	(8.0)	2.1	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ	精 良	橙	良好	輪状つみみ	199728 00052
44	Sk100	皿	(13.0)	(5.6)	3.0	体部下半 ケズリ		ケズリ 露胎	陶 器	オリーブ	良好	器底に口縁部 唐津18世紀 前半	199728 00046
45	Sk100	皿	(13.0)	(4.8)	3.0	体部下半 ケズリ		ケズリ 露胎	陶 器	薄い オリーブ	良好	器底に口縁部 唐津18世紀 前半	199728 00049
46	Sk100	皿	(12.4)	(4.4)	3.1	体部下半 ケズリ		ケズリ 露胎	陶 器	薄い オリーブ	良好	器底に口縁部 唐津18世紀 前半	199728 00050
47	Sk100	香 炉	(9.8)	5.6	6.7	体部下半 ケズリ		ケズリ 露胎	陶 器	赤 褐	良好	唐津18世紀 前半	199728 00047
48	Sk100	漆 鉢			(5.2)	口縁部に 施胎			陶 器	赤 褐	良好	18世紀	199728 00045
49	Sk100	漆 鉢			(4.7)	口縁部に 施胎			陶 器	赤 褐	良好	18世紀	199728 00051
50	Sk100	大 鉢			(4.0)		ハケによ る波状文		陶 器	赤 褐	良好	二彩 17世紀～	199728 00048
51	Sk100	土 鍋			(5.0)	ナデ	ヨコハケ		細砂粒	にぶい橙	良好	外面 スス付着	199728 00042
52	Sk100	土 鍋			(2.3)	ハケ目	ケズリ		細砂粒	灰 褐	良好	外面 スス付着	199728 00042
53	Sk100	長頸壺	(22.0)		(7.5)	回転ナデ	回転ナデ		精 良	灰	良好	自然灰輪	199728 00044
54	Sk100	鉢		(25.0)	(7.3)	タタキ ナデ	ヨコナデ		1～2mmの 砂 粒	灰	良好		199728 00043
55	Sk100	丸 皿	(8.5)	1.9	(7.4)	ケズリ	布目		少量の細砂粒	灰 白	良好		199728 00052
56	SP22	壺			(6.3)	ナデ	ナデ		細砂粒 多量の角閃石	にぶい黄橙	良好		199728 00032
57	SP22	壺			(4.3)	ナデ	ナデ		2～4mmの小礫 石灰・角閃石・金母	にぶい黄橙	良		199728 00033
58	SP54	壺		7.0	(4.6)	ナデ	ナデ		細砂粒 石灰・角閃石・金母	にぶい黄橙	良	外面 スス付着	199728 00037
59	SP33	磁 石	(6.6)	2.1	(5.1)				砂 岩			断面の片方が欠 損・底面は3番	199728 00034
60	SP40	碗	(16.8)		(5.3)	手持ち ヘラケズリ			細砂粒 石灰・赤色粘土	橙		丹波製鉄跡	199728 00036

Tab.6 遺物観察一覧表③

図 No.	出土遺物	器 種	寸 法 (cm)			調 査			胎 土	色 調	焼 成	備 考	登録番号
			口径点	底径厚	器高幅	外 面	内 面	底 面					
61	磨丸土	高 杯			(4.1)	ヨコナデ クスリ	ナデ		2mm程度の 砂粒、石英	橙	良好		199728 00061
62	SP62	杯 蓋	(14.0)		(1.6)	面ハカリ 器ナデ	器ナデ		細砂粒	灰	良好		199728 00039
63	SP62	杯 身	(14.0)		(1.9)	器ナデ	器ナデ		細砂粒	灰	良好		199728 00040
64	SP62	蓋	(17.6)		(5.0)	ヨコナデ	ヨコナデ		細砂粒 石英・角閃石・金雲母	にぶい黄褐色	良		199728 00038
65	SP83	蓋			(2.1)	ヨコナデ	ヨコナデ		1～2mm程度の 砂粒、金雲母	灰 褐	良好		199728 00041
66	SP136	蓋			(1.3)	器ナデ	器ナデ		細砂粒	灰 白	良		199728 00056
67	SP120	碗	(17.0)		(2.0)	器ナデ	器ナデ		精良	灰オリーブ	良好	白磁	199728 00054
68	SP143	扁平片刃 石斧	(2.5)	0.8	3.0				粘板岩			上部欠損	199728 00059
69	SP35	紡錘車	4.7	0.7	4.7				片岩			未製品	199728 00035
70	SP121	石 皿	3.5	0.5	2.3				サヌカイト				199728 00055
71	SK195	石 皿	2.8	0.7	1.0				サヌカイト				199728 00060

遺物観察表凡例

1. 口径・底径・器高の数値の単位はcmである。また、() 内の数値は現存または復元値を示す。
2. 陶磁器の色調は棕色を示す。
3. 白磁の分類は横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について一形式分類と鑑年を中心として」『九州歴史資料館研究論集4』1978年に拠った。
4. 登録番号は、久留米市教育委員会文化財保護課が定める出土遺物の登録番号である。

4. ま と め

今回の調査は、調査面積約220㎡とかなり狭い範囲であったが、弥生時代の円形竪穴住居1軒、奈良時代の方形竪穴住居1軒等大きな成果を上げることができた。1～4次調査の結果から予想されたとおり、弥生時代から歴史時代の遺構が確認され、山川南本村遺跡が更に南西へ広がることが判明した。

検出された弥生時代の円形住居は削平が著しく残りが極めて悪かったが、中央に土坑をもち、その両端に小ピットを設けるという広義の意味での松菊里タイプの住居であることが確認できた。主柱穴は4本で中央土坑と壁へ等間隔の位置に設けられている。出土遺物は少なかったが、前期末の年代が考えられる。奈良時代の竪穴住居は一片3mとかなり小形のものであるが、本遺跡では初見のものである。出土遺物も甗を始め、皿・椀等豊富であった。特に細片ではあるが転用碗の出土は本遺跡では初めてである。本遺跡より東へ約300mの位置には御井郡と山本郡の郡境があるが、その200m山本郡側には山本郡衙の推定地が存在する。山本郡衙の比定地には、本遺跡より東へ約4km離れた単弁6弁軒丸瓦が採集された不光院跡の東側、字山本付近とする説など諸説あるが、いずれも発掘調査等は行われておらず推定されているに過ぎない。本遺跡周辺の発掘調査が更に進み、官衙的性格の強い遺物・遺構が確認されれば、山本郡衙の比定地問題に一石を投じることになるかもしれない。又、江戸時代の遺構については、現在の地権者の豊福氏によると、代々江戸時代からこの土地に住まわれているとのことである。SK100等から出土した唐津の陶器等から、18世紀前半頃から現在までこの土地に居住している事も考えられよう。

V. 西海道跡（第2次）

1. はじめに

本調査は平成9年9月1日、地権者の■■■■氏より専用住宅建設に先立つ埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに端を発する。依頼地は、久留米市と筑後市の市境にあたり、久留米市荒木町荒木字東3801番地1に所在する。

当該地は、古代官道である西海道の推定ルート上に位置し、近くに周知の黒土東遺跡（1979年発行の『福岡県遺跡等分布地図』の031018番）と黒土西遺跡（同031017番）が分布し、遺跡の包蔵が十分に予想された。地権者と協議を重ね、現家解体後の基礎工事着工前に西海道の確認を目的としたトレンチ調査を実施することで話がまとまり、発掘調査の運びとなった。

今回の開発が専用住宅であるため、新たな建物に影響のない庭部分を選定し、長さ19m×幅約3mの東西調査区を設けて行った。対象地面積約452m²の内約57m²を調査し、平成9年11月13日～11月21日まで実施した。

2. 位置と環境

遺跡は、八女市北部を東西に横断する人形原台地と呼ばれる低丘陵から広川に向かって北西に派生したひとつの低台地上に立地する。遺跡の現標高は約16.5mを測る。広川は台地に沿った形で北側の低地を西流しつつ開析し、西約6kmの大善寺町黒田にて筑後川に注いでいる。標高40～20mの人形原台地は、数多くの古墳が築造されていることでよく知られ、今でも大小の古墳が残存している所である。

本遺跡（10）を中心とした半径2km内には、古くは旧石器の発見地から、縄文・弥生時代の遺跡、国の史跡にも指定された前方後円墳や裝飾古墳、近世の灌漑水路など、数多くの遺跡が分布している。久留米市のみならず近隣の三瀬町・筑後市・広川町も含め、時代順に歴史的環境を追ってみる。

旧石器・縄文時代は、ナイフ形石器や有舌尖頭器が採集されている北宇土池遺跡（藤山町）や八反田遺跡（8）が分布する。荒木町藤田の才観塚遺跡や狐坂遺跡の散布地では、縄文時代のサヌカイト製削器が発見され、筑後市の田佛遺跡（12）からは縄文期と思われるおとし穴が検出されている。

弥生時代では、甕棺墓が発見された出水の上遺跡（5）があり、筑後市の蔵数東野屋敷遺跡（13）から中期の列状に埋葬された甕棺墓と土壇墓が検出されている。該期の注目遺跡は、何といても天神浦遺跡（9）である。元禄10年（1697）と享保7年（1722）の二度にわたって、13口と5口の計18口の闘矛が天神浦池の築堤工事の際、偶然に一括発見されている。筑後地方において最多の武器形祭器埋納例であり、貴重な資料である。田佛遺跡では後期の集落が調査されている。他に、実態は不明であるが、筑後市の長原山遺跡・鯉の谷遺跡が人形原台地の南斜面に分布する。

古墳時代になると、荒木町の高良台丘陵や人形原台地上に数多くの古墳が築かれ、墓域として重要な位置を占めている。主な古墳を列挙すれば、荒木町の豆塚古墳（6）・才観塚古墳（7）、三瀬町の十連寺古墳（11）、筑後市の瑞王寺古墳（14）、広川町の石人山古墳（15）・弘化谷古墳（16）があり、他にも多数の小円墳が群集している。いずれも、5c中～6c代の所産で、特に、人形原台地の一大古墳群は古代豪族筑紫君に連なる自長クラスの奥津城と考えられている。丘陵から一段低く、河川の氾濫原に面した

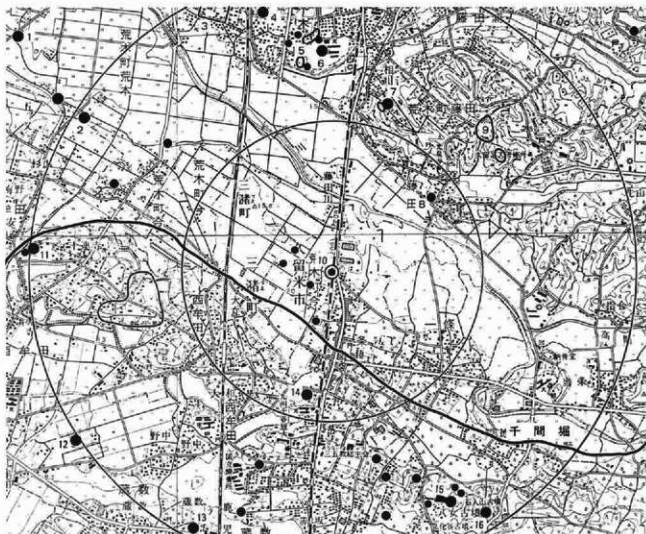


Fig.98 周辺の道跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|----------|----------|----------|-------------|
| 1.旗原遺跡 | 5.出水の上遺跡 | 9.天神浦遺跡 | 13.蔵敷東野屋敷遺跡 |
| 2.一の左右遺跡 | 6.豆塚古墳 | 10.西海遺跡 | 14.瑞王寺古墳 |
| 3.立小路遺跡 | 7.才観塚古墳 | 11.十連寺古墳 | 15.石人山古墳 |
| 4.小寺遺跡 | 8.八反田遺跡 | 12.田佛遺跡 | 16.弘化谷古墳 |

低台地上には、該期の集落が散在している。5世紀後半の竪穴住居が発掘された一の左右遺跡（2）、5世紀代の良好な竪穴住居群が検出された田佛遺跡、7世紀後半の溝や掘立柱建物・倉庫より成る集落を検出した旗原遺跡（1）が分布する。

奈良時代以降の歴史時代では、大宰府へ通じる官道（西海道）が南北に通過し、今でもその一部が国道209号線と重複している。筑後国内に置かれた三駅のひとつ「萼野駅」が本調査地の南方約4kmの筑後市前津付近に想定されている。特に、久留米市から筑後市にかかる西海道推定ルート上には、官道の通称である字「車地」・「車路」の地名が今も残っていることでよく知られている。先の旗原遺跡では8～9世紀まで集落の一部が存続している。

中世段階の遺跡は、鎌倉時代の荒木近藤氏館跡と想定される立小路遺跡（3）や室町時代の道路跡や掘立柱建物群が検出された小寺遺跡（4）が知られる。江戸時代では、三瀬町西牟田の十八銭電遺跡や薩摩街道沿いの一條田（町屋）がある。特に、宝暦年間（1751～1763）に広川町の五ノ家から三瀬町の西牟

田まで、広川より導水した「千間堀」は有名で、当時、東西25町・南北30町の範囲を灌漑し、耕作地として開発したと言われている。今も農業用水路として命脈を保っており、今日に伝える歴史的な近世遺産である。

3. 調査の記録

(1) 調査の概要

今回の調査は西海道の路面の検出を含めた残存状況の把握とその構造がいかになっているかを調べるため実施したものである。開発に係わる基礎工事の深さが、涵洞面および包含層にまで達しないことから、全面調査ではなくトレンチ調査とした。推定ルートの方に直交するよう、東西に長い調査区を設置した。最初、小型の重機を導入して包含層に相当する暗茶黒色土上面まで掘削を進め、その面から人力によって掘り下げを行った。

家屋の解体後から新たな基礎掘削の合間にあわせて調査期間を設定し、11月13日から開始した。奈良～平安時代の古い段階の路面はすでに失われており、中世期の最終段階でさえも明確な路面の検出はできなかった。辛うじて、側溝の底面付近が検出されるに留まったので、全体の写真撮影終了後に調査区の南半分をさらに深掘りした。漸く、古い段階の浅い幅広の溝が2条断面に現われ、初期段階の道幅をつかむことが出来た。トータルステーションにて実測し、土層断面実測後、直ちに埋め戻しを行ない、11月21

日に終了した。



Fig.99 調査地点の位置と周辺地形図 (1/2,000)



Fig.100 重機による表土剥ぎ風景

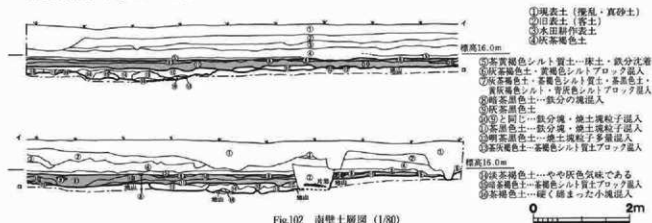


Fig.101 調査区掘り下げ風景

(2) 遺構の概要

検出した遺構は、古代の道路跡（東・西両側溝を含む）1条、中世期の溝1条である。

土層の概要 (Fig.102・103)



土層の概要 (Fig.102・103)

調査区南壁の土層状況は、Fig.102の通りである。地山を形成する黄褐色～青灰色シルトから不連続に堆積するため、人工的な改変がなされたことを窺わせる。下方から大きく古代期 (土層番号⑫～⑮)、中世期 (同⑧～⑪)、耕作化に伴う近世以降 (同③～⑦)、現地表と宮土になる。

道路跡

SF1付SD3・4 (Fig.104～107)

南北に走向する道路遺構で、路面は既に削平を受け、両側に幅広の側溝が検出されたに過ぎない。西側の地山が20cm高いことから、当初、側溝も含めた道幅全体を削り出して造営されたものと考えられる。西溝 (SD3)・東溝 (SD4) とともに深さ20～25cmの残存である。壁面の土層観察から、前後3回掘り直されており、新しくなるにつれて内側に狭くなる。溝真々間の道幅は12.5m→11m→9mと変化縮小



Fig.103 南土壁状況 (北西から)

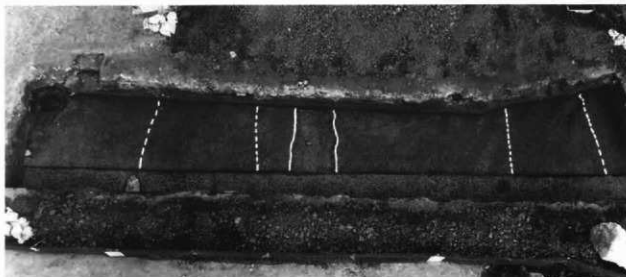


Fig.104 調査区全景 (北から)

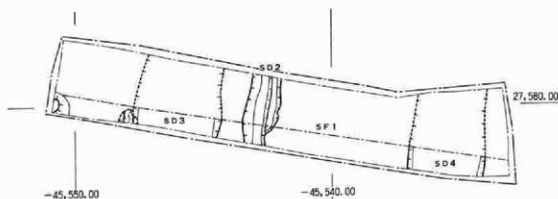


Fig.105 道橋配置図 (1/150)



Fig.106 SD3土層断面（北から）



Fig.107 SD4土層断面（北から）

する。溝埋土からの遺物はない。

溝

SD2 (Fig.105-108)

調査区中央に検出された南北走向の溝である。幅130cm、現存深さ約20cmを測り、東側に段を有する。溝底に細かな砂層が厚さ1～2mm介在し、流水の痕跡と考えられる。13・14世紀代の遺物を含む堆積層が埋土に連続することから、中世期の最終段階の西側溝の可能性が大きく、路面は古代よりやや東側を過していたことを物語る。埋土から土師器小皿、陶器、縄羽口片が少量出土している。

(3) 遺物の概要

今回の調査面積が狭いこともあって出土遺物は少なく、パンコンテナー1箱分であった。大半は中世期の⑧～⑪層からの出土で、⑧・⑩の上位と⑪の中位に便宜上分けて報告する。包含層下位は古代期の⑫層に相当し、遺物の出土はごく僅かであった。実測可能な遺物は全部で25点あり、個別の説明はTab.7にゆずる。ここでは注目される資料について触れておく。

Fig.109の7は土鍋片で、外面の口縁下に低い台形状の釘が1条貼り付けられる。北部九州ではあまり見られないタイプで、12世紀後半～15世紀前半に髑髏鍋が多く認められる広島県西半の安芸国タイプに近



Fig.108 SD2検出状況（南から）

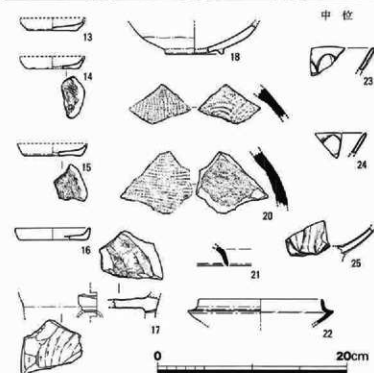
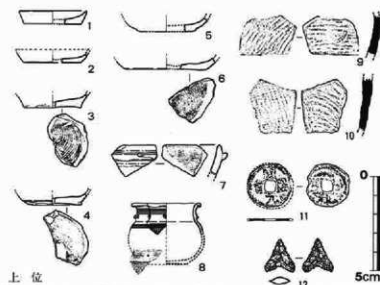


Fig.109 出土遺物実測図 (1/2・1/4)

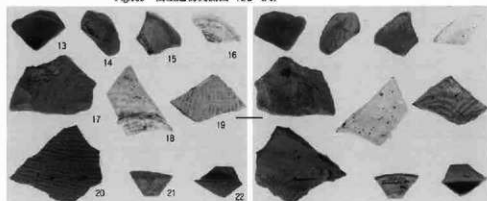


Fig.112 出土遺物③ (表・裏)

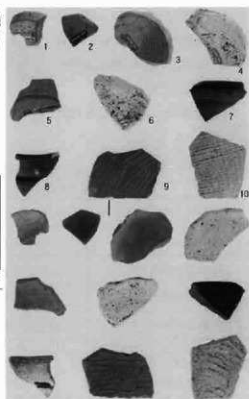


Fig.110 出土遺物① (表・裏)



Fig.111 出土遺物② (表・裏)

似する。古代末～13世紀に認められる筑前国は、鐙の突出が長い。また、豊後国や薩摩国のものも同種で、やや異質である。

8は褐釉罐座柳斗文小壺と呼ばれる陶器片である。白色長石を付けた罐座

は1個残存するが、2個目の根元部分が認められることから、割付復元すると本来13個になろう。器壁が2～3mmと非常に薄手作りで、惜しくも、内面の黒褐釉の発色が悪く、高温で溶けてしまっ

ている。類例が限られ、韓国の新安海底遺物に大変類似しており、中国江西省の贛州七里鎮窯製品の可能性が高い。

11は紀地銭と呼ばれる唐代の

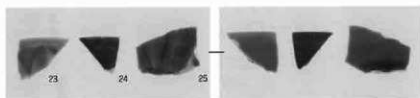


Fig.113 出土遺物①(表・裏)

Tab.7 遺物観察一覧表

No.	出土遺物	材質	器種	法 量 (cm)			色 調		調 整		胎 土	構成	備 考	登録番号
				口徑	底徑	器高	外 面	内 面	外 面	内 面				
1	包造器上段	土師器	小 皿	7.1	6.0	1.4	淡赤褐色	淡赤褐色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	赤色粒子・微砂粒	良好	糸切り底	199733 00001
2	包造器上段	土師器	小 皿		6.0	(0.9)	褐色	茶褐色	回転ナデ	不 明	赤色粒子・精良	やや不良	糸切り底	199733 00002
3	包造器上段	土師器	杯		6.0	(1.4)	ベージュ色 灰褐色	ベージュ色 灰褐色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	赤色粒子・精良	良好	糸切り底	199733 00003
4	包造器上段	土師器	杯		6.2	(1.2)	ベージュ色	ベージュ色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	角閃石・赤色粒子 精良	やや不良	糸切り底	199733 00004
5	包造器上段	土師器	杯		6.3	(1.4)	ベージュ色	ベージュ色	回転ナデ	回転ナデ	1mm大の石英粒子・精良	良好	糸切り底	199733 00006
6	包造器上段	土師器	杯		8.8	(1.3)	白っぽい ベージュ色	白っぽい ベージュ色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	角閃石・微砂粒 やや粗い	良	糸切り底	199733 00005
7	包造器上段	土師器	鍋			(3.3)	灰褐色	緑褐色	回転ナデ クズリ	横ハバ目	角閃石・赤色粒子・ 微砂粒	良	肩付・安芸国に多いタイプ	199733 00007
8	包造器上段	輸入陶器	小 皿	7.4		(3.4)	地 軸 赤褐色	地 軸 赤褐色	回転ナデ	回転ナデ	灰色を留す ザラツとした感じ	良好	福岡県福岡市文京、中国 西陲鎮七里鎮窯産か?	199733 00010
9	包造器上段	須恵器	壺			(4.0)	灰 色	灰褐色 →明赤褐色	平行文タタキ	青銅文+平行文タタキ	4mm大の石英塊・ 微砂粒・精良	良好		199733 00008
10	包造器上段	須恵器	壺			(5.4)	灰 色	灰 色	長格子文 タタキ	長格子文 タタキ	黒色粒子・精良	良好		199733 00009
11	包造器上段	銅製品	古 銭	(2.2)	(2.3)	0.1							「開元通寶」紀地銭 合島5年(945) 補録	199733 00013
12	包造器上段	サカサ イト	石 皿	1.8	1.6	0.4								199733 00012
13	包造器中段	土師器	小 皿		5.2	(0.9)	茶～褐色	茶～褐色	回転ナデ	不 明	角閃石・金雲母・ 赤色粒子	やや不良	糸切り底	199733 00016
14	包造器中段	土師器	小 皿		5.4	(0.9)	茶～褐色	茶～明褐色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	精良	良好	糸切り底	199733 00017
15	包造器中段	土師器	小 皿		5.8	(1.1)	茶～ 灰褐色	茶～灰褐色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	精良	やや不良	糸切り底	199733 00015
16	包造器中段	土師器	小 皿	7.8	7.2	1.3	黄褐色味の ベージュ色	黄褐色味の ベージュ色	回転ナデ	回転ナデ 静止ナデ	角閃石・金雲母・ 赤色粒子	良	糸切り底	199733 00014
17	包造器中段	土師器	火盆?		(14.0)	(1.9)	明茶褐色	明茶褐色	回転ナデ クズリ	静止ナデ	金雲母の極微粒子・ 赤色粒子	良好	煮しめり、内面に油煙 の黒色付着あり	199733 00018
18	包造器中段	瓦 焼	鍋		6.0	(3.0)	灰 色	灰 色	不 明	ミガキ	キズ割か、厚1mm 大の黒灰色粒子	やや不良	三角隅台切り付け ヘラ切り底	199733 00019
19	包造器中段	須恵器	壺			(3.1)	灰 色	灰黄色	平行文タタキ +縦目文	青海波文 タタキ	微砂粒	堅緻		199733 00023
20	包造器中段	須恵器	壺			(5.6)	灰 色	灰 色	格子目文 タタキ	静止ナデ	黒色粒子・微砂粒	良好	胎土中央は紫色を呈 する	199733 00022
21	包造器中段	須恵器	杯			(2.0)	灰 色	灰 色	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒子・精良	良好	MT85型	199733 00020
22	包造器中段	須恵器	杯	12.9		(2.6)	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	黒色粒子・精良	堅緻	最大径15.4cm MT85型	199733 00021
23	包造器中段	青 磁	碗			(2.3)	薄い オリーブ色	薄い オリーブ色	クズリ出し 縦溝升	回転ナデ	灰色・精選されてい る・ガラス質	良好	奈良県系1-5b類	199733 00024
24	包造器中段	青 磁	碗			(2.1)	くすんだ 緑茶色	くすんだ 緑茶色	クズリ出し 溝升	回転ナデ	ベージュ系の灰色・ 黒色微粒子・粗い	良好	奈良県系1-5b類又は I/類、水割が著しい	199733 00026
25	包造器中段	青 磁	碗			(2.9)	薄い オリーブ色	薄い オリーブ色	クズリ出し 縦溝升	回転ナデ 転りクズリ	灰色 精選されている	良好	奈良県系1-5b類、 内面入り	199733 00026

開元通寶で、保存状態は芳しくない。裏面下位に不鮮明な文字が鋳出されており、敢えて類例を採せば「越」に似ている。久留米市内では、荒木町の小寺遺跡から緋銭の状態で数枚出土している。

17は土師器底部片で、全体の器形が今ひとつわからない。丁寧な削りによる透かしがあり、その数は不明である。外底面は回転へう削り調整で、内面見込みはナデ仕上げである。内面に黒色の付着物が認められ、炭化物か油煙か墨か判断できないが、油煙に近いことから、火舎か香炉の用途が想定される。削り手法が8世紀代のものに似て丁寧であり、奈良期の所産であろうか。

以上、全体を眺めると、12の石甕や古墳時代の須恵器(21・22)を除くと、13～14世紀代の遺物で占められている。

4. ま と め

今回の調査は小面積であったものの、古代～中世の西海道の側溝を検出し、推定ルート下に間違いなく往時の官道が埋没していることが明らかになり、所期の目的が一応達せられた。出土遺物は少なかったものの、貴重な資料も一部含まれており、大きな成果が得られた。

(1) 西海道について

今回検出した西海道は、路面の検出には至らなかったが、辛うじて残された側溝から推定されていた官道ルートを裏付けることができた。古代期のものは、上に重複する中世期のものによって削平されているものの、地山の高さや側溝の重なり具合から、造営手法や規模の変化をある程度復元可能であった。その敷設手順は、まず地山の青灰色シルト・黄褐色シルト層まで、側溝を含む約15m幅で恐らく約1m近く掘削する。その後、約1m幅の側溝を掘り下げ、路面に若干の工夫を凝らし(砂利を敷くか、版築状に突き固めるかなど)、カット面より幾分高めて使用したものであろう。山村氏のBタイプ(カット工法)に相当する。道幅は溝の真々間で古い方から12.5m→11m→9mと狭くなっ



Fig.114 字「車地」と推定西海道ルート (1/10,000)



Fig.115 調査地より北方を望む(南から)

ている。筑後市の鶴田中ノ塚遺跡で検出された西海道でも、側溝の重複から新しくなるにつれ狭くなったことが確かめられている。類別として、推定東山道武蔵路がある。11世紀初めまでに4時期存在し、側溝真々の道幅が12m→12m→9m→7.5mと徐々に狭くなっている。道路の維持管理や新たな敷設に伴う労力などから考えても、既設幅の中で改変・掘り直した方が効率的・合理的と考えられる。当然、律令期の弛緩・衰退に伴う歴史的な背景も考慮する必要がある。

なお、中世期のものは、SD2を西側溝とすれば、幅10m以上の道幅が想定できる。この段階も、硬化面は検出できず、全体を覆う包含層の出土遺物から、少なくとも14世紀代には廃絶したものと考えられる。

筑後市から久留米市を通る西海道のルートには、官道の通称とされる「車路」・「車地」の字名が沿線に点在していることが指摘されており、当該地もそのひとつ「車地」（筑後市に位置する）の字界に隣接する。Fig.114はその字「車地」の範囲で、西側の字界は官道に沿って一直線になって残っていることが看取されよう。また、そのラインは今日の市境とも重なっている。なお、筑後国内の西海道関係の推定ルートについては、後の文献を参照いただきたい。

（2）褐釉播座柳斗文小壺について

中世期包含層上位から出土したこの小片は、厚さ2.5～3mmと薄く、復元口径7.4cm・頸部径6.3cm、推定胴部最大径約8cmを測り、高さは約7cm前後に想定できる資料である。この種の小壺は、国内でも14世紀中頃～15世紀中頃に生産され、茶入れ容器として利用されている。中国製の釉調・器形・装飾意匠を模倣したもので、室町期の瀬戸焼に見ることができ、瀬戸市七曲窯の播座小壺が有名である。愛知県瀬戸市に築窯された古瀬戸の笠松窯・山口八幡3号窯・孫右衛門3号窯出土の資料を実見比較したところ、器壁の厚さ・胎土・播座の素材・口縁の形状と反り・櫛目の施文部位などにおいて違いが看取でき、国内産の可能性は薄い。

窯以外の発掘出土品では、太宰府市の観世音寺子院金光寺跡（大宰府史跡第67次）と福岡市の博多遺跡群（筑港線関係第3次）の2点が知られるのみである。ほかの報告書を渉猟していないため漏れがあるが、極めて類例に乏しい。両者を実見したところ、本資料も含め三者三様である。しかし、博多の資料が胎土・櫛目の状態・器壁の厚さ・外面の釉調など、本資料に最も近い。金光寺のものは、口縁形状・櫛目の施文部位・器壁の厚さ・播座の釉などが異なるものの、胎土は似ている。いずれも、明確な時期の決め手を欠くもので、博多は14世紀後半～末の10号溝（水濤跡か）、金光寺はⅢ期遺構（15世紀～16世紀中頃）を覆う黒灰色土層の上に堆積する暗灰色土包含層、本資料は13～14世紀の遺物を含む包含層からそれぞれ出土している。少なくとも13世紀以前に遡るものではなさそうである。

また、東京国立博物館蔵で、山梨県北巨摩郡高根町出土の資料は、わが国で知られる唯一の完形品の褐釉播座小壺である。この資料は中国産とみなされており、写真図版からではあるものの様々な属性が本資料と類似する。

一方、海外に目を転ずれば、韓国木浦市の新安沖の海底から引き揚げられた遺物に類例がある。日本向けと考えられている貿易沈没船から、元時代の至治3年（1323）銘木簡と一緒に、大小十数点の「褐釉露胎囊形壺」が発見されており、14世紀前半以前に焼かれた資料で、中国産と報告されている。実見を果していないが、『新安海底遺物』報告書の写真図版から判断すると、極めて本資料に類似している。

中国産の輸入品とすれば、南宋～元代に焼かれた江西省贛州七里鎮窯の製品に年代的にも符合し、大

きさ・形状・櫛目の施文部位と状態・播座など、類似する属性が多い。出光美術館蔵の窯跡資料破片の写真図版を見ても、かなり似た印象を受ける。

以上のように、今回発見の褐釉播座柳斗文小壺は、中国製の輸入品の可能性が強く、わが国にもたらされて珍重された数少ない発掘出土品と言えよう。

今回の報告にあたって、資料提供など色々な教示を賜った以下の各氏に厚くお礼申し上げます。井上喜久男・木本雅康・小林勇作・徳永貞紹・中島恒次郎・永見秀徳・西田正治・日野尚志・藤澤良祐・森本朝子・山村信榮・山本信夫・横田賢次郎・吉留秀敏（敬称略・五十音順）

参考文献

1. 井上喜久男 1996 「考古学から見た瀬戸茶入」『遠州の観た茶入—中興名物茶入を中心として—』五島美術館(図録)
2. 板野首鏡 1997 「西国分寺地区の道路遺構—武蔵国分寺跡北西地区の遺跡—」『古代文化』49—8
3. 出光美術館 1982 「1949～1981 近年発見の窯址出土中国陶磁展」(図録)
4. 大石昇 1996 「出土銭貨情報—小寺遺跡—」『出土銭貨』第5号 出土銭貨研究会
5. 神崎かず子 1991 「瀬戸茶入の基礎的研究(1)—瀬戸窯出土の茶入—」『愛知県陶磁資料館研究紀要』10
6. 木下良 1978 「[車路]考—西海道における古代官道の復原に関して—」『歴史地理研究と都市研究』上巻 大明堂
7. 九州歴史資料館 1981 「大宰府史跡—昭和55年度発掘調査概報—」
8. 齋柄俊夫・他 1997 「中世食器の地域性」『国立歴史民俗博物館研究報告—中世食文化の基礎的研究—』第71集
9. 薛翹・陳文華(植崎彰一・熊海堂訳) 1992 「新安沈船中の七里鎮窯瓷器についての略論」『愛知県陶磁資料館研究紀要』11
10. 永井久美男編 1994 「中世の出土銭—出土銭の調査と分類—」兵庫埋蔵銭調査会
11. 植崎彰一編 1977 「日本の美術—古瀬戸—」No.133至文堂
12. 長谷部素爾・今井敦 1995 「中国の陶磁②—日本出土の中国陶磁—」平凡社
13. 福岡県三潁郡小学校教育振興会 1953 「新考三潁郡誌」
14. 福岡市教育委員会 1969 「都市計画道路博多駅築港線関係埋蔵文化財調査報告(Ⅲ) 博多」福岡市埋蔵文化財調査報告書 第204集
15. 藤澤良祐 1982 「古瀬戸中期様式の成立過程」『東洋陶磁』第8号
16. 文化公報部文化財管理局編 1983・1984・1988 「新安海底遺物」(資料Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・総合編)
17. 松村一良 1983 「筑後地方を縦断する古代駅路」『Museum Kyushu』通巻9号
18. 山村信榮 1993 「大宰府周辺の古代官道」『九州考古学』68

*なお、道跡分布図に関わる各道跡の調査報告書については各市町村のものを参考にしたが、個別の列挙はしなかった。

VI. 道蔵遺跡第12次調査

所在地 久留米市大善寺町中津516-2
調査原因 専用住宅建設

調査期間 平成9年9月1日～11月4日
調査面積 166.81m²

位置と環境

道蔵遺跡は久留米市の南西部にあたる大善寺町に所在し、筑後川の支流広川の右岸標高約8mの地点に位置する。この遺跡は大正3年に行われた耕地整理の際、甕棺や広形銅戈が出土し、はやくから注目されていた遺跡である。また、ここ数年、下水道工事や圃場整備に伴う発掘調査がおこなわれ、弥生時代中期から、鎌倉時代にかけての複合遺跡であることが



Fig.116 調査地点位置図 (1/25,000)

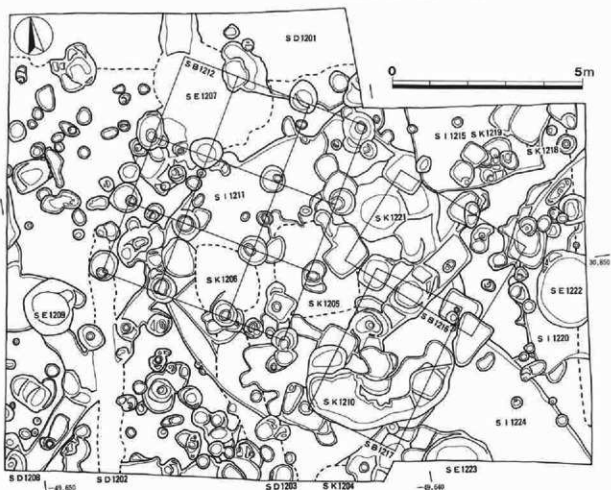


Fig.117 道蔵遺跡第12次調査 遺構配置図 (1/100)

明らかになっている。今回の調査地点は第1次調査や第6次調査で検出した二重の環濠の延長線状であり、字名も屋敷で、弥生時代～中世まで多くの遺構遺物が検出されるものと想定されていた。また、一昨年から同一敷地内で、第10・11次調査を実施しており、その際、弥生時代の竪穴住居や土坑・井戸などの多数の遺構も検出しており、これらの遺構の広がりも想定されていた。

検出遺構

第12次調査で検出した遺構は、近世の溝状遺構2・井戸1、奈良～平安時代の土坑1、古墳時代の掘立柱建物1棟、弥生時代の掘立柱建物2棟・竪穴住居6軒・井戸3基・土坑3基の他多数のピットを検出している。これらのうち古墳時代の掘立柱建物は総柱建物で、2間(6.3m)×2間(5.4m)分を検出したが、北側に近世の溝が切ってきており、北側にもう1間延びるものかもしれない。

出土遺物

弥生土器・土師器・須恵器・近世陶磁器など、コンテナ45箱分の遺物が出土した。

弥生時代の遺物は包圍層をはじめ各遺構から出土しており特に井戸からは大量の土器が出土している。また、土坑SK1237から、長さ5.8cm、厚さ0.6cm、断面が薄錐形を呈し、先端部に刃部を持つ用途不明の青銅製品が出土している。

所見

今回の調査では当初想定した弥生時代の環濠は検出出来ず、竪穴住居や掘立柱建物、土坑、井戸などの遺構を検出した。これらの遺構は弥生時代中期前半から古墳時代前期に集中しており、遺構のありかたとしては環濠の内部に当たるものかと考えられる。当該地の西側も道蔵遺跡第4次調査として発掘調査を行っているが、環濠は検出されていない。しかしながら、第4次調査地点は約1m程削平されており、消滅したものかとも考えられる。また、調査区中央部で検出した掘立柱建物は3間(6.3m)×3間(5.4m)の規模を持つ総柱建物である。北側には近世の溝が切ってきており、恐らくもう1間北側に延びるものと考えられる。



Fig.118 西区全景（気球写真）



Fig.119 東区全景（北から）

VII. 久留米城外郭遺跡（第4次調査）

所在地 久留米市城南町10番地の68
調査原因 専用住宅建設

調査期間 平成9年11月5日～12月18日
調査面積 150㎡

位置と環境

久留米城外郭遺跡は、久留米市街地の北西部、城南町を中心とした範囲にあたり、現在、篠山小学校・城南中学校・明善高校などが所在する文教地区に位置する。江戸時代の外郭地区は久留米城の南面に築かれた上・中級武士の武家屋敷地である。第4次調査地は、この外郭地区の中央部に位置し、江戸時代前期の延宝図によると戸田・佐々の両家、後期の天保図では田代・久徳の両家に相当する地点である。

標高9.8mを測る洪積段丘の低台地上に立地する。

検出遺構

現地表より約1m下で遺構面を検出した。この検出面は、江戸時代後期の整地面と考えている。主な検出遺構は、江戸時代中期の土坑4基・溝1条、後期の土坑3基・埋壘3基、昭和時代の池1基などである。中期の土坑は18世紀前半の穴蔵或いは廃棄土坑で、溝は屋敷地の区画溝。後期の土坑は19世紀前半の廃棄土坑である。また、池は戦前もしくは戦後直ぐに埋め戻された遺構と推測される。

出土遺物

近世・近代の陶磁器をはじめ、土師質土器・瓦質土器・瓦・土製品・木製品・金属製品・石製品・ガラス製品・ゴム製品・銭貨・動植物遺体など多岐にわたる遺物が多量に出土している。総数はバンコンテナで87箱分である。

陶磁器類は概ね17世紀末から昭和前期まで、土製品は人形や土鈴など、木製品は漆器碗・曲げ物・下駄・木簡・各種製品の板片・へら・独楽・雄車など、金属製品は鋸り金具・煙管・銅匙・灰甕・火箸・包丁・瓦釘・鉄釘など、石製品は砥石・磨き石・火打ち石など、ガラス製品は薬瓶・インク瓶・おはじき・ビー玉など、銭貨は慶長通寶・寛永通寶・明治の二銭銅貨など、動植物遺体では小動物や犬などの骨・貝殻・松笠や梅や瓜などの種子、棕櫚の皮の繊維で作った縄や簞などがある。

所見

調査地は久留米城外郭の武家屋敷地の一角にあたる。延宝8年（1680）図によると、佐々家と戸田家の両屋敷地に跨がった地点である。南北に検出された溝は、この両家の境を示す溝と推測される。佐々家となる地点では、昭和前期の池が約1/2を占めるため良好な資料を得られなかったが、戸田家となる地点では、南北5.5m・東西4.0m・深さ2.1mの隅丸長方形の大きな土坑を検出した。土坑は18世紀前半の穴蔵か土取りの遺構もしくは廃棄土坑かは即断できないが、この土坑から墨書で「小野数右工門様戸田主鈴」と記す木簡が出土している。屋敷地を特定できる重要な資料である。また、多量の陶磁器に混じって、久留米で焼かれた朝妻焼が含まれ、銭貨では非常に希少な「慶長通寶」（1607年初鋳）が出土している。

今回の調査では、主に18世紀前半と19世紀前半の遺構・遺物を検出した。これらの遺構・遺物は、各時期の武家の生活を如実に物語る貴重な資料であると共に、消費地特に武士階級における陶磁器の組成や流通の問題、遺構の年代決定などに重要な資料を提供するものである。



- | | |
|-----------------|--------------|
| 1. 久留米城址 | 10. 魚屋町遺跡 |
| 2. 外郭遺跡 第4次調査 | 11. 呉服町遺跡 |
| 3. 外郭遺跡 第1次調査 | 12. 陶器町遺跡 |
| 4. 外郭遺跡 第2次調査 | 13. 三本松町遺跡 |
| 5. 外郭遺跡 第3次調査 | 14. 通町遺跡 2丁目 |
| 6. 京阪小路遺跡 第1次調査 | 15. 通町遺跡 6丁目 |
| 7. 京阪小路遺跡 第2次調査 | 16. 通町遺跡 7丁目 |
| 8. 荏島小路遺跡 | 17. 通町遺跡 9丁目 |
| 9. 田町遺跡 | |

Fig.120 調査地点位置図 (1/30,000)



Fig.121 調査区全景（西から）



Fig.122 土坑SK31全景（東から）

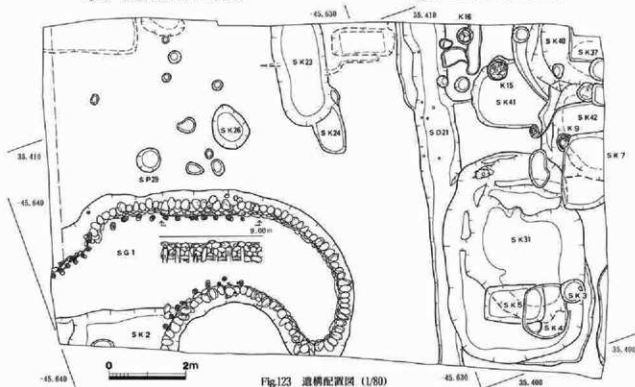


Fig.123 遺構配置図 (1/80)

報告書抄録

ふりがな 書 名	くるめしないいせきぐん 久留米市内遺跡群
副 書 名	
巻 次	
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書
シリーズ番号	第140集
編 著 者 名	大石昇・白木守・園井正隆・神保公久・富永直樹・近澤康治
編 集 機 関	久留米市教育委員会
所 在 地	〒830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎ 0942-30-9225
発行年月日	平成10年(1998)3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東郷原寺 第6次調査	久留米市 東郷原町 東郷原寺	40203	030074	33° 19° 04°	130° 31° 17°	19970523 S 19970619	61m ²	専用住宅 建設
正福寺 第3次調査	久留米市 飯分町 正福寺 宇日遺	40203	030656	33° 17° 16°	130° 32° 17°	19970618 S 19970625	60m ²	専用住宅 建設
西原敷 第3次調査	久留米市 飯分町 西原敷 宇南原敷	40203	030132	33° 19° 19°	130° 31° 59°	19970722 S 19970905	360m ²	専用住宅 建設
山川南本村 第5次調査	久留米市 山川町 山川南本村 宇南本村	40203	030323	33° 18° 23°	130° 34° 14°	19971007 S 19971110	220m ²	専用住宅 建設
西海道跡 第2次調査	久留米市 飯分町 飯分遺 熊本寺遺	40203		33° 14° 52°	130° 30° 40°	19971113 S 19971121	57m ²	専用住宅 建設 確認調査
道 庵 第12次調査	久留米市 大瀬崎町 久留米市 宇日遺	40203	030767	33° 16° 39°	130° 28° 01°	19970901 S 19971104	167m ²	専用住宅 建設
久留米城外郭 第4次調査	久留米市 城南町 城南遺	40203		33° 19° 05°	130° 30° 36°	19971105 S 19971218	150m ²	専用住宅 建設

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
東郷原寺 第6次調査	集落跡	弥生時代 江戸時代	段状竪穴・竪穴住居 竪穴・溝・埴輪	弥生土器・石器 縄文・中近世の陶磁器	段状竪穴は前期末、竪穴住居は 前期末～中期前半、竪穴は中 期前半、溝は磐原庄に因する溝か。
正福寺 第3次調査	散市地 集落跡	縄文時代 平安時代	溝 ピット	縄文土器・石器 土師器・須恵器	縄文土器は阿蘇式、北久瀬山式、 弥生・古墳の相型土器。平安時代の 溝は正福寺に因するものか。
西原敷 第3次調査	集落跡	弥生時代 S 江戸時代	溝 土坑	土師器・須恵器・黒色土器・輪 入陶磁器・近世陶磁器・縄文 土器・弥生土器・石器・鉄器	弥生時代中期の遺物が谷状の溝 から多量に出土。古くに集落 の痕跡が残り定される。
山川南本村 第5次調査	集落跡	弥生時代 奈良時代 江戸時代	竪穴住居・竪穴土坑 竪穴住居・土坑	弥生土器・石器 土師器 近世陶磁器	山川本村遺跡の範囲が更に西 へ広がることを確認する。
西海道跡 第2次調査	道跡跡	奈良時代 S 中世	道跡 溝	土師器・須恵器 瓦器・青磁・埴輪小器・ 陶瓦・陶管	西海道の推定ルート下に側溝を 検出し、西道が確認された。
道 庵 第12次調査	集落跡	弥生時代 S 近世	竪穴住居・竪穴住居 物・井戸・土坑・溝	弥生土器・土師器 須恵器・磁器・ 石器	弥生時代前期～古墳時代の生活 跡、古代・中世の生活跡、弥生の 土坑から不明な銅製品が出土。
久留米城外郭 第4次調査	集落跡	江戸時代 昭和時代	土坑・溝 池	近世陶磁器・瓦・木製品・銅 製品・燈籠・銭貨・動物骨遺 存・薬罐・漆器・ビー玉	18世紀の前半の土坑から戸田家 の屋敷地を特定する木簡が、ま た、豊後通商が出土している。



道蔵遺跡



久留米城外部道跡

平成9年度 久留米市内遺跡群
久留米市文化財調査報告書 第140集
1998年3月31日

発行 久留米市教育委員会
〒830-8520 久留米市城南町15-3
編集 教育文化庁文化財保護課
〒830-8520 久留米市城南町15-3

☎ 0942-30-9225

印刷 服部印刷株式会社
久留米市梅満町410-1

☎ 0942-33-6431
